

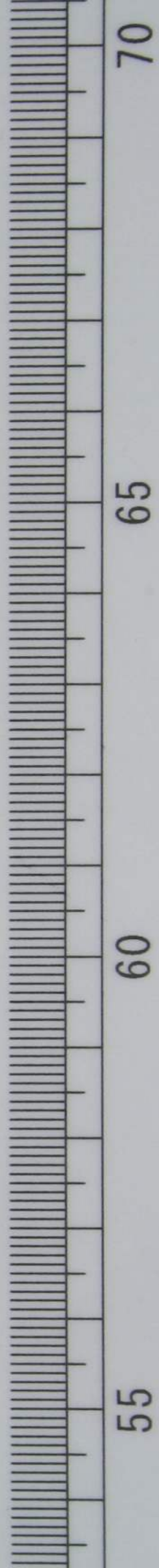
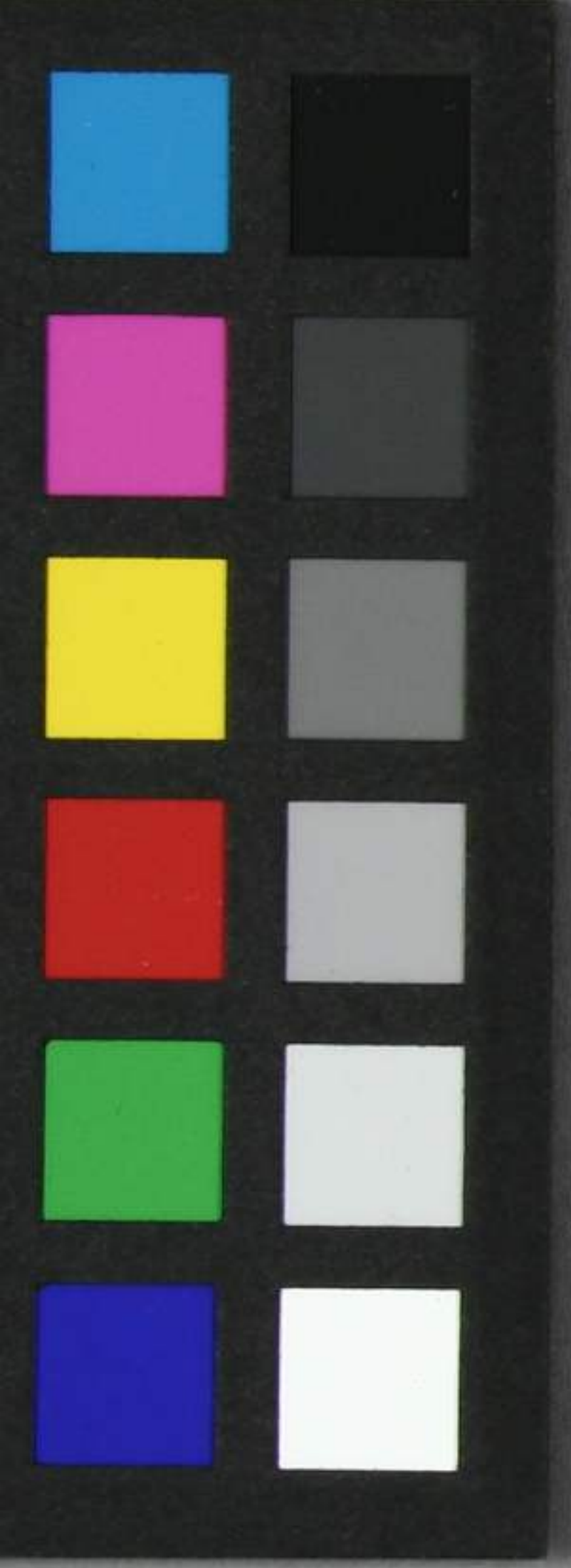
鬢華集

中澤臨川著

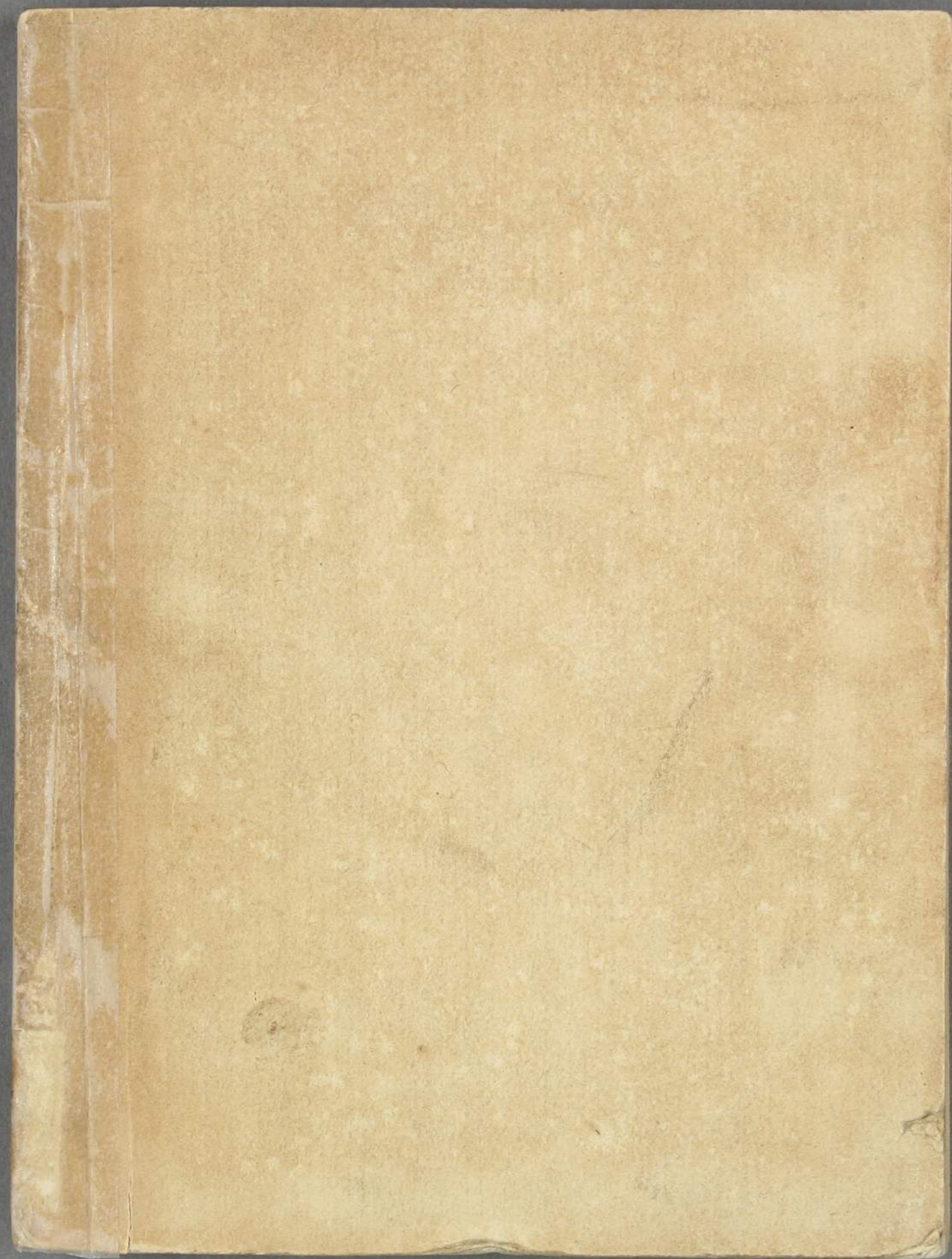
本間文庫

文庫 14

D 18







S. Meyers  
28/5/908  
(25)

鬢華集

中澤臨川



文庫14  
D18

壽華集

中  
巻  
上

序

この華よ、憂あらば一夜に老ゆべし。たま〜白盡  
して色香褪すとも、再び待つべき春はなからん。汝  
が緑の脆きをいと愛みて、このさ〜やかなる草紙  
に名く。唯月光拂ふべからず、照して憂あり、そのし  
る銀の條もて汝が色を染めなばいかに。

“It is just that this youngster should die away; a sad thought for me, if I had not some hope that while it is dwindling I may be plotting, and fitting myself for verses fit to live.”.....Keats

# 目次

ポール、エ、ヴァイルジニー	痴情偈語	戀(ユーゴ)	古蹟(シャトールリアン)	蜜の蜂	ヴ <sup>井</sup> ナスの死(譯)	見ぬ戀、旨ひの戀	審美私説
.....七六	.....七一	.....六〇	.....四七	.....四四	.....三四	.....一六	.....一頁

會話(ツルゲーネフ)	一〇〇
招魂賦	一〇四
なき母	一一〇
精舍論(ユーゴー)	一一四
茶の花	一四一
田舎(ツルゲーネフ)	一四五
野蜜	一五一
閨村の生活	
愛神ウラニア	
涙	

秋郊一路	
坐右銘	
萬人の母	
夢	
兩天使	
冬の夜	
涙の響	
涙	
女人創造(譯)	一六四
墓場感懷	一七〇

老女(ツルゲーネフ)……………一七三  
 信仰の廓清……………一七八

# 鬢華集

中澤臨川著

## 審美私説

O! What is this that knows the road I came.

ミューズの諸神統へ給ふ藝術たくみの道に數はあれど、總じて九つの神



座に流動せるいみじき調和あり。名けて美と謂ふ。美の興趣は一切を超絶して飄搖たり。眞覺して靈體の奥に會得すへし。理義の斷じて拘束すへき所にあらざるなり。

心靈の海洋々たり。千萬の花一時に開き、千萬の月一時に映り、波は轉々して其戯を致し、鳥は狂樂して久遠の音に出づ。かくの如きは心靈の姿なり。理性の泡、汚慾のよごみそれ一瞬の幻のみ。秘奥の光明一たひ照らは、また何の執着かあらん。靈は美に生き、美は靈を俟て全し。眞覺の指すところ、同情の赴くところ、靈光の示すところ、美の郷は遠く、美の郷は高し。

心靈に係る所のものは心靈をして其最後の説明者たらしめよ。興趣の赴く跡は理性の瞻望を許さず。幾多のバウムガルテンをして美學の系統を立せしむるも、フ#ロメル（フクロメル）の聲は希臘の昔より音階の律を超絶して、別に悠々たる別天地の詩人が心靈を誘ふ者あらずや。已みなんか、風は捕捉すへからず、興趣は具象すへからず。追尋して迷路に入らば世の人愚と爲さん。而も我等は悔るものにあらざるなり。

亾渺たるかな天地、人犖然としてこの土に立つ、何處よりして來り、何處にか往く。來るに道あり、空の彼方を想ふ。歸るに道あらん、遠き故里を忍はずや。この憧憬の心之を美と謂ふ。されは美は心靈の喘ぎなり。人間最高の熱情に現はれたる理想なり。天なる榮光の追求なり。大なる我と小なる我との默契なり。秘奥なる一物に對する祈禱なり。心靈の其父に捧げし讚美にして、また同時に其父

を喪ひたる哀歌なり。其憧憬の目的物の信仰の上より神と稱はるゝとも、哲學の上より絶対原理と稱はるゝとも、或は眞如ともロゴスとも稱はるゝとも畢竟は宇宙的生命の本源と吾人の心靈の同一なるべき無意識的眞覺によりて催起されたる熱情これ即美に外ならず。

吾人のこの説は昔榮<sup>ハ</sup>のし美の哲學と符節を合す。曰く、地上に肉體を負へる人間は彼の來りし故郷、彼自らの他の世界を追尋して或は高く、或は低く逍遙遊す。然れども、須臾にして自然の光に射らるゝや、彼は失神昏迷して、またこの現世界の事物の外一物たも見ると能はず。此に於てか神は心靈の前に青春の榮光を送り給へり。そは麗しき肉體を利して、善美の天上界を回憶せしめんか爲なりと。

花一に紅きや、鳥音一に朗らかなるや。花の紅きに觀念寂光の境界あり、鳥音の朗らかなるに無碍無礙の圓融境あり。心靈の眼一たひ開かば、山川立ろに妙法善美の相を現して、花已に現實の花にあらず、鳥音豈に梢上の肉聲あらんや。假相は剝がれ、絶対の實在は惟一の日となりて、直上直下たゞ美の光瀾に溢れ、吾等は暫く天つ故郷の慈母の膝に甘美の夢を貪るに似たり。之を興趣の情態と謂ふ。されば美とは、吾等の心靈が自然の物象を通して、其故郷なる宇宙生命と相抱擁するの情態にして、吾等の花を愛づるは、花其物に終局の目的を存するにあらず、花の形體を通して、無意識的に在天の靈光を仰慕するなり。花の色彩の奥に心靈熱情の理想を體讀するなり。再ひ語を換へて云はゞ、藝術の目的は假りに自然を摸倣して、其自然の奥に隠れたる典型的實在、即ちプラトンの理想を追求する

なり。典型的實在とは、宇宙生命の本源にして、我に潜んでは靈と稱はるゝものにあらずして何ぞ。所謂興趣は美なる物象を通して隠れたる心靈の眼を開くの謂にして、古來入神の繪畫詩歌、皆この無滞杳渺の一物を捕へ來て、有質礙のものと爲したるに外ならず。且ジャン、ポール、リヒテルの音樂に就て何の語を爲すかを聞け。曰く、嗚呼妙樂、過去と未來とをそか脆き姿にて、我等の傷手に<sup>いたで</sup>凭くまで近く招來する爾はこの世の生命の夕の息なるか、將たまた未來世の晨の空氣あるか。遮莫爾の響は、天使第二の世界より、怡悅の調を奪ひ來て、我等の嘿したる心に、我等の恐ろしき夜に、遙けき上天の隱微なる春樂を傳ふる反響なりと。この核心に中れる深語は、就中諸藝術の間に立て、最も興趣の横溢せる音樂の心を傳へ、併せ

て彼か所謂第二世界と、人間の心靈とに奇しき棧橋を爲せる美の精神を闡明したるものにあらずや。

美の心は斯の如し。さらば進んで問はん、最もこの心を發揮するに適したる藝術の様式は何なりや。勿論、音樂なりと一切の審美家は答へん。さらば、猶進んで問はん。最もこの心を發揮するに適したる藝術の對象或は被摸倣物は何なりや。曩に、吾人の掲げたる古の美の哲學は答へて言はん。曰く、神は心靈の前に青春の榮光を送り給へりそは麗しき肉體を利して、善美の天上界を回臆せしめんが爲なりと。この説は戀愛を以て美の極致と爲せるものなり。ゲーテも亦其詩 Psyche の中に左の意味を含めぬ。曰く、ミューズの諸神人間の心靈に詩歌の術を授けたれども、散文の域を脱する能はざり

しに、キュピット來りて凡ての秘密を教へぬと。吾人も亦この説に左袒するものなり。古來天才の作物は皆その然る所以を證せずや。吾人をして暫く戀の心を描かしめよ。

嗚呼何物か地上にこの心の如く淨く麗はじきものありや。戀は青春の士女を再生せしめ、彼等の心中に世界を改造す。彼等は日光の歌を聞くなり。彼等は星の文を讀むなり。鳥の音や、浪の香や、流るゝ水、靡く小草、燃ゆる眼に解き難く、捉へ難き秘密を語りて、石に同情あり、雲に啓示あり。萬物一時に有情有知の相を呈す。彼等は最早執着の肉塊にあらざるなり。彼等の心靈は長き眠の眼を開き、『幻影深き生命の香』を尋ねて漂浪す、

『あなたは彼處、

燄の愛のこころの故里へぞ』 (獨弦哀歌)

洵に自然を味はんとならは先づ戀せよとかや。古の哲人か彼の眼最早花と空とをそが碎片的の光に於て見ず、却て崇高なる一團と觀すと言ひて、美の極致にいたり深き心の情態を讃わしが、戀の情熱に燃わたる心靈の自然を色讀する亦斯の如きなり。

Nun verlass' ich diese Hütte,

Meiner Liebsten Aufenthalt,

Wandle mit verhültem Schritte

Durch den ödern finstern Wald:

Lund bricht durch Busch und Eichen,

Zephyr meldet ihren Lauf,

Und die Birken streum mit Neigen  
Ihr den süssten weihrauch auf

Wie ergötzt' ich im Köhlen,

Dieser schönen Sommernacht!

O wie still ist hier zu fühlen,

Was die Seele glücklich macht!

Lässt sich kaum die Wonne fassen;

Und doch wollt ich, Himmel, dir

Tausend solcher Nächte lassen,

Gib' mein, Mädchen Eine mir.

嗚呼この氣高き林中の狂人を看よ。彼は、今美の宮殿なり。彼が心  
靈の影は月光と與に散り、軟風と與に吹き、涼しき樺の香に乗りて、  
静なる夜の世界に盈ち満てり。薔薇の肌に葶の血流るゝを覺ゆるが  
如き彼は、今其足を浸せる小川の響と與に歌の調しらべを合すにやあらん。  
詩人古より天籟の作を這般の消息に於て得たりと云ふもの洵に所以  
ある哉。

猶戀の特質として數ふべき一の條項あり。ユーゴーの語に曰く、  
廣きこの世を唯の一人に縮め、唯の一人を神にまで擴くと。されは  
戀する者にとりては、其愛人こそ總ての善きもの、總ての麗しきまこと  
なれ。是ある哉、彼は最早愛人の其父母に似たるや、將た其兄弟に  
似たるやをだに知らざるなり。唯知る彼は胸に絶えざる面影の花の

夕の如きを、露の晨の如きを、虹の如きを、鶯の音の如きを。彼は殆んど聖京を巡る巡禮者の熱心と敬虔もて、彼女の一舉一動に魔せられつゝ高き悦をとる。花顔偏に穠麗なるが爲めか、否らず。細腰一に袅々たるか爲めか、未だ當らず。彼の靈慧は花顔細腰の奥に、花顔細腰を通して、美の本體を把持し、『燄の愛の心の故里』を發見するなり。"If I love you, what is that to you?" この語の意を推するに、我が愛するは爾にあらず、爾の心にもあらず、爾の光なり、爾自身知らざる或るものぞとなり。

進んで美の屬性を説かん。美に二つの重要な屬性あり。第一は美の興趣の瞬間的、夢幻的なることなり。第二は美の印象の不滿、悲愁等の感情と伴ふことなり。言ふ勿れ、第二屬性は第一屬性の必然なる結果のみと。感官慾の満足將た瞬間的なれども、人は美味に飽きて鼓腹するとき、不滿悲愁等の感情ありや。是を以て看るも二屬性の差別相を持つてると自ら明なり。

虹を看よ、美の興趣は當に此の如し。虹は根なき花なり、幻の榮なり、美の興趣は當に此の如し。失樂天使暫く夢に天上に遊ひて、昔日の榮華を回憶する如きは興趣の情態にあらずや。林間に懸れる無形の龜甲琴微かに幽玄の音に出でゝまた跡なきか如きは興趣の情態にあらずや。桃容李姿老い易く、天才の末路哀むべき者多し。ミューズや、ビナスや、嫉み多く、心變り易き神なりけり。

美は第二屬性として不滿悲愁等の感情を伴ふ。この經驗は妙手の彈聲に耳傾けたる者、詩人の佳作に感納同化したる者、自然の懷に

Still sad music of humanity を聴きたる者の等しく閱歷したる所なるべし。而してこの印象の最も甚しきは戀愛に於て之を見る。涙の鎖につながらざる戀の能く成就し得たりや、悲の餌を食まざる愛の能く長らへしや。美や戀や、charm にして、同時にまた不満なり、喘ぎなり。何處のシーザーか戀の前に傲慢なるを得たりし。當に言ふべし、人を満足せしむる詩は詩にあらず、人を満足せしむる戀は戀にあらずと。

げにや人は失樂天使なり。地上に肉體の桎梏を受けつゝ、遠き天つ故里の御空を慕へり。彼の心靈に許されたる惟一の自由は美あるのみ。然るに、美の興趣は一瞬なり。醒めては唯悲愁と不満と悔恨との残れるあり。此に於てか仰慕の心厚く榮光の追求に焦眉辭せざる者をして、死を想はしむ。死は肉體の滅落なり、心靈の脱累なり。彼岸に永遠無窮なる美の郷あらむ。沙翁のソネットにも、ゲーテの諸作にも、この憧憬の心を窺ふべく、殊に吾等は詩人ノワリスが『夜の讚歌』及キーツが『鶯の歌』の中に、隱微なる這般の消息の最も能く現はれたるを悦ぶ。

願くば花のもとにて春死なん

其きさらぎの望月のころ……………西行

## 見ぬ戀盲ひの戀

其形見たらんより其聲を聞くに、情をますたぐひこらおほけれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ、思をちやくにくだき……許六「聽箴」

巖本如雲氏の隨感錄に、『見ぬ戀、盲人の戀』と云ふ一節あり。しはらくこの標題をかりて、我か思ふ所をも述へんと欲す。

人間の感官中最も貴むべきものの視聽二官なることは古くプラトンの對話にも見えたり。近世の心理學者、審美學者の稱ふるところもまたここに定まれり。一步を進めて、さらば、この二官中孰れか貴むべく、孰れか賤むべきかと云ふ問題に到りては、仲々に至難のもの

なるへし。生理學者も關係すべく、心理學者も關係すべく、美的方面の見解には審美學者の力をも藉らざるへからず。されど普通日常の視察によるに、視官のかた情慾に近づきて卑しきものゝ如し。聽官こそ渾ての感官中最も獸性とかけ距りて、神秘靈妙の機關と觀たるは非か。耳に訴ふる音樂が、最高の美術と言はるゝも理ありこそ覺へたれ。遮莫、戀と呼ぼるゝ一個人間の心的顯象の、聖の聖なる本性を汚す、いとも惡むべき魔物は、我等の眼なり。春の野に優なる風情の見ゆればこそ、罪なき一もと堇の花は、情慾ならぬ情慾の人間の手に摘まれて、果ては紫の瓣を泥土には委するなれ。あやにく其の人の姿を見ての戀なれば、心の奥に潜めるまことの戀は、獸性の猛々しきに汚されて、其うるはしき眉を見るにも、其白き手に



觸るゝにも、はしたなき思のみ伴はるゝ是非なさよ。如かし其人を見ずして其心を戀ひ、この眼の盲ひて唯た思人が鶯囀の妙音に酔はんには。此に於て、我は見ぬ戀旨ひの戀てふものに一種の靈氣あるを思はんと欲す。

總じて人の感官は幾く久しき遺傳の爲めに汚されたり。一感官の缺焉するとき、他の感官は之を補ふものぞ。一方に汚れたる感官を失ひたる者は、他に清新なる感官をうるの利あり。この人吊すへきか如くにして、又慶すへし。『即興詩人』のマリヤか述懐を聞かすや。『目しひなりし時の心の取像はかり奇しきは莫し。先つ身におぼゆるは日の暖さ、手に觸るゝは神社の圓柱の大いなる、霸王樹の葉の潤き、耳に聞くは、さまざまの人の聲音なり。一の官能の缺くるものは、

そのあるところの官能もて無きところを補ふ。人の天青し、海青し、堇の花青しといふを聽きて、われは堇の花の香を聞き、そのめでたきを推し擴めて、天のめでたかるべきをも、海のめでたかるべきをも思ひ遣りぬ。視根の光明闇きときは、意根の光明却りて明あるものにや』と。便なノ瞽者よ。いとほしき哉、御身達の親は御身達を世にも不幸の者に産めり。されど世の人は御身達を爪弾きすれど、天に居ます悲父母はいかで爾を捨てん。情慾のほだしあす視根の光明はよし斷たれぬとも、そは却て御身達の福祉ならずや。また鬢華の青き齡に、明を失ひたるミルトンは、天を恨みずして、神に謝せり。世にも美はしき聖なる戀は御身達か独占の寶ならずや。形骸の幻華に迷ふことなく、直に意根の光明に照して、心を戀する御身達こそ

世にも羨むべきの限なれ。佛蘭西の詩人シャトールブリアンの晩年に一つの話あり。一千八百四拾七年の初めつ方、彼は痲痺病にて惱みしが、當時レカミール夫人は目しひなりき。日毎三時といふに、彼は夫人の枕邊に荷はれぬ。最早何物をも見分けぬ夫人は、手さぐりつゝ、最早五體に感じなき老人の方に手さしのべぬ。二人の手觸れぬ。生命いのちの火は漸く消えんとす、されど愛は尙生き残り。視官を失ひたる夫人と、觸官を失ひたる詩人の戀は、意根の明かなるによりて聖く照されぬ。かゝるは悲しかりけり、かゝるは貴とかりけり。

缺陷世界に求むべき誠の満足といふものはいとまれなる仲に、是はまた目しひなる人の戀人もてるは奇しくも妙へなる幸福の一形式ならずや。世の人の追求する功名も、渠にとりては何の用をかなさ

ん。世の人は美しき衣着て、己れの貌をほこるといふに、彼にはよし飾るべき品ありとも、そは却て苦しかりけり。爛として輝く星の光も、艶なる花の姿も、見るに見へず、聞くに悲の種は増すめり。夕ぐれ窓に當れば、秋風の面にきて、見へぬ梢に嚶々たる鳥の音を聴きつゝ、一時を慰むとすれど、萬古の愁は遠きより吹いて、物戀しき淋しさの感を爲す奈何ならん。げにや萬事につけて物足はぬ瞽者も、流石に人戀しき思はありて、己の求むる所をたゞ一むきに其方に瀉げは、其情の満足せらるゝ曉にありて、人一倍の幸福を覺ゆるは其どころならずや。朝にも夕べにも、たゞ己に侍づきて、笑はせもし慰めもし呉るゝ可憐の女性を思ひては、かくも言ふめり。この世は我等二人の爲めに作られしと覺し。彼女の全心の我にあら

すは、などかくまで親切なるをうべきやと。顔は見えねど、心の鏡にはまさしく仙女の面影うつれり。我に近よる衣の音は、それよ軒端の鳩の羽ばたきにも似ずや。歌ひつ、行きつ、もどりつ、かひとしく働く姿は見へねども、彼女の行動は皆我を中心とせり。淋しきに、恐ろしきに、この我に縋りて救を求むるを見れば、頼まれ甲斐なき不具の身をもかくまでに頼みてかど、頼む身よりも頼まる身の先づ嬉しく、悲しく、落る涙は樂しきものなりけり。

悲しき日に、樂しき昔を憶ふより悲しきはなしとは南歐の詩聖が至語と聞く。悲しき境にありての樂み程樂しき者はなしと我は言はん。人生幸福の極致は、己の愛せらるることとを自覺したる曉にあり。あらず、己の如き者すら愛し呉るものゝこの世にもありけるは—

と自覺したる曉にあり。しかしてこの自覺こそ瞽者の最も深切に感ずる所ならずや。不具の身に取りては、仕へらるゝことは、抱かるゝことよりも猶増して嬉しかるべし。目しひとな、あらず、あらず。彼は決して旨しひならず。愛情の溢るゝ所に光は溢れたり、満足のあるところに闇はおそはず。我手に觸るゝものあり、彼女の手なり。我額に軽く接吻するものあり、彼女の唇あり。我に近よる香しき呼吸を聞く、彼女の息なり。彼女の満身は我かものなり、其愛より、其憐みまで。何物か残されたりといふや、何物か足らずといふや。げにや盲ひの身にしあれば、廣き浮世もあらず、香しき世界も知らず、觸れうるところの彼女の手、抱きうるところの彼女の身は、直ちにこれ大千世界なり、直にこれ造化なり。花は見えねど仙女を見た

り、星は知らねど神近う居ます。『心』と名のつく靈草は、暗き瞳の中に培はれて、奇くも妙へなる花を開くものぞ。時にはそと寄り沿ふ彼女に近づく温みを覺へて、驚かされて、嬉しき心配に正直なる胸を千々に碎くしほらしさ。慰めらるゝ時、歌ひて聞かさるゝ時、笑て戯れらるゝとき、(さかり瞽者の戀は凡て受動なり)女の聲の美しさは、視聽二つ乍ら具備せる人間の能くえて解する所にあらず。洵に瞽者の戀は魂たまに於て抱かるゝなり。闇黒界の樂園よ。

世にも醜みにくきグインプリンと瞽女ディーの戀は、『笑ふ人』の中にユーゴの靈筆によりて描かれぬ。彼女は言ふめり『麗しき君よ』と。世に捨てられ、世を捨てて、狭き巢に住む二羽の小鳥、戀の餌食の啄むに盡きねば、浮世の冬の餓も知らず。『日とは何ぞ』と乙女の問ふ

に、『温く光るものなり』と男答ふれば、乙女はしばしためらひて、『さらば君の如きものにや』と曰ふ。またあるとき『我は醜みにくし』と男曰ふに、『醜みにくじとはいかなるものぞ、悪しき人を指すにや。グインプリンよ、君こそは善き人なれ、君こそは美はしけれと』乙女答ふ。宜べこそ、戀は目しひと言へは、目しひにして戀するは二重の盲ひなれ。美しき夢を夢みるとは、正に瞽者の戀をさすものにや。

十金の金かねは常に十金の金にあらず。貧しき者には萬金とも見ゆべく、窮措大にはゆゑしき財産なるべく、貴人の眼よりは塵あくたに異ならざることあらん。同じく十金の金を獲つる故を以て、其獲たる者の歡を同じとするは非なり。同じく十金の金を失へる故を以て、其失ひたる者の悲を同じとするは非なり。獲たる時大いなる歡を取

るものは失ひたる時に大いなる悲あり。願くば貧者をして獲る時の歡を大ならしめ、失ふ時の悲を輕からしめよとは誰人も祈るところなるへけれど、まゝならぬ浮世はこの罪なき我儘をも許さぬとみへたり。Though He slay me, yet I will trust in Himとまで悟りたる大聖の心は賢し。我等凡夫の身にとりては、彼の蒼の恨めしきこともあるがかし。茲に瞽者が愛を獲し時の歡ひに比べて、其一たひ獲しところを失ひたる折の彼の悲よ、思ふも斷腸の極みなれ。淨瑠璃『壺坂寺』に描かれたる按摩佐和一が述懐は、まさに木石をも泣かしむべし。わが筆も亦深く其うちに入るに忍びず。

むかし女あり。春ならは櫻か、きりやうも才も人に優れて、春丈とともに延ひ行く乙女心の末たのもしかりしが、彌生花の盛りを、いとほしや、眼を病みて盲しぬ。二世を契りし男の薄情にも棄て去なんとするに、女さどらず。真心こめて別を惜む情の、心も詞も及ばず、哀れ深かりしと云ふ。

わかれ行く君を見なむのしはらくを

ひとみたまへよ諸の神

如上我か淺き心海に浮ひし『盲ひの戀』は拙き乍らに酌みて盡しぬ。さらば進んで『見ぬ戀』の性を驗せん。如雲氏の言に、見ざる人を戀するも麗はしけれど、我に戀する人のなからずやと信じて、自ら温たかにする更に氣高しとある如く、戀の眞性の這の般にひそめるは、『盲ひの戀』のそれに同じ。唯悲哀の趣の彼にありて、是に缺けたる代りに、悠にして優なる情の二段とこなたに立添はりたるが

少しく異なるのみ。されば、是に就て敢て多くを言ふの要なければ、我が曾て物の本にて見たる一實話を掲げて、筆を擱かんと欲す。

巴里の獄舎の中には『美術家』と呼はるゝ者あり。彼は丹青の術をわきまわたるか。否。彼はたゞ二三の繪具を有するのみ。据るべきベンチと、椅るべき壁と、針と、匙と、是彼か要する渾てなり。盜賊の心は小供の如く、極彩色を好み、野蠻人の如く文身を好めり。美術家の匙は彼等か第一の需用を充し、其の針は第二の需用を充す。二三の囚徒より／＼に談らひて、隊を組み、彼等か葡萄酒の一杯を頒ちて、美術家をして花束を作らしむ。其花束には必ず彼等の人數に相當したる花を挿み、花には一々に囚徒の番號を誌せり。出來たる花束は秘密の間に『サン、ラザール』に送らる。サン、ラザールに

は女囚あり、女のある所に *pity* あり。花束は便なき者供の間をめぐりて、稱嘆の的となり、數日にして密使は再び男囚に返さる。曰く、バルメヤは目下香を擇ひ、ファンニーは石巖を擇ひ、セラフィンとは風呂草を擇べりと。この日よりして後、三人の囚徒は、バルメヤといひ、ファンニーと云ひ、セラフィンと云ふ戀人もてる身とはなりぬ。初の程こそ何事もなけれ、憐みの情は終に嵩じて、誠の戀ともなるものぞ。女達言ふ、我は嫁つげりと。さらば誰にか嫁ぎしや、自らも知らざるなり。面の當り見ばいかに驚くやらん。鬼をもあざむく盜賊といふ、世にも恐ろしきものこそ、生娘か其許嫁の若者を思ふ如き誠の情もて、<sup>なまけ</sup> 彼等の慕ふ男にはあれ。獄舎の中にて男女の囚人の相逢ふは固よりあるべからず。されば其對手の若きか、美は

しきかをさへ知るに由なきなり。彼等は唯夢中の逢瀬を樂しみて、偏に見ぬ人の面影にあくがる。げにや彼等は見ねばこそ戀するなり。景慕の心は常に深秘の中より生まるゝものぞ。

人の心よ何の溝ぞ。いまし試みに堀れ、堀りて幾千尺の深きに達せよ。猶一點の火の君が明眸に輝くをみん。一もとの百合花を媒として、姪女は盜賊を戀するなり。愛蓮の咲く心池の深さを、誰か何尺とは量りえたる。盜賊はこの乙女によりて理想化されぬ。姿を見ねば、まして名は知らず、たゞ夢に見る面影の薔薇の香に包まれたるさへ貴とけれ。是よりして後、花園や、卯月日の光や、鳥の音や、草の香や、蜂のさゝやぎや、奇しき春潮の韻ひや、皆この盜賊の身に伴はずと云ふとなし。中にも哀れなるは、さる乙女の身の上にと

そあれ。兩換屋ジョセフが殺されてより、間もなき程のことなり。一日一つの花束は男囚の方より「サン、ラザール」に送られつ。彼女は其うち「リラック」の一枝を擇ひぬ。旬日乍りへて、乙女は自由の身となりしが、花の主るじのいと迫めて忘れられ、野遊ひの歸るさ、「リラック」の一もと摘みもて來て、空色の「リボン」結ひて己れの枕邊にかざしぬ。花はかくして凋み行けり。明る日四時は兩換屋ジョセフを殺したるマルガレット及ひラタが死刑に處せらるへき時なり。巴里全市の民の如く乙女もこのしらせえしが、別に心には留めざりき。春の日和を、乙女は室に座して、編物しつつ、時に眼は凋みたる枕頭の花にそゞげり。忽ちにして時計の四時をうちける折、彼女は非常の物を見たり。一點の紅の花の面に現はるゝよと見れば、

次第々々に大きくありて、終に白妙の床に滴りぬ。そは一滴の血なりき。この日この時、マルガレット及びラタは殺されしなり。明に知るべし、花の主のこの二人に限られたるを。されど孰れぞ。不幸なる乙女は狂ひに狂ひて狂顛院のうちに逝きぬ。夜を日に繼ぎて乙女は叫へり、『妾はラタ、マルガレットの妻なり』と。

男の方にもやさしき情は流石にこもりぬ。賊魁デラポートの死刑に處せられんとする日、彼は其仲間に問ひぬ。『今朝應接間を美しき女は訪はさりしか』と。また同じ獄舎にてアブリルとよぶ一囚徒は己の財産五フランを舉げて見ぬ戀人に贈らんことを願へりとなり。盜賊、姪女、花束、まことの戀。君笑ふや。なせぞ。天下また他にこの個の眞面目あるべからず。深きは人心の靈宮なる哉。パンセオ

ンの墓田に眠れる詩人の言葉を聽け

There is one spectacle grander than the sea that is the sky;  
there is one spectacle grander than the sky—that is the interior  
of the soul.

嗚呼我も亦誤てるか。其描かんと欲せし<sup>ほの</sup>盲ひの戀や、見ぬ戀や、愈深くして愈知り難く、愈神秘にして、愈貴し。我は大象を評する盲者の痴愚—それよ盲者と云へは、運命も盲ひなれば、人間も盲ひ、なまなかに肉の眼の禍ひする浮世のさがこそ果敢けれ。



## ヴキナスの死

ピエル、バナンは奔放の狂人にあらず。時に黯然として消魂の淵に沈むよとみれば、忽ち歡喜の天そらにあまがけるやうなる病の發作こそあれ、彼は誠に柔和の化身あり。折ふじは、瞳を壁にこらして、モデル寫すやうなるそぶりすることあり。折ふじはまた、手眞似の畫筆えい抛ちて、身を床に委ね、偏にある面影の前に拜跪して、胸裂けたらん如くすゝり泣きす。さて、聲も途切れて呼ぶなりけり、ロセツトよ覺めずや、ヴキナスは逝きぬ、我わがか業既に了れり、覺めずやロセツトと。

案ずるにロセツトは覺めざりけん。その聲のいよゝ迫り、其調のいよゝ訴ふる如きにもしるじ。いにけん戀を嘆き悶もて、意中の人ひとの再びこの世に覺めんことを願へるあはれを。時に見よ、やさしきは彼か失望の狂亂なり。哀憤やまで、我と髪かきむしりつゝ叫ぶを聞けば、あらず、あらず、彼女は未だ死せず、ヴキナスは逝きぬ、されどロセツトはながらへたり、早くこの世に立ち歸らずや、我ロセツトの君と。

あはれや未まだうら若きこの青年は不治の狂癲にかゝりぬ。彼は畫家なりき。されど一つの作あるのみ。而も彼をして一躍大家の列に入らしめたるものはげにこの作なり。『ヴキナスの死』は萬人の嘆稱を博せり。恍惚として眺め入れる群集引きも切らず、畫前は常に

人の山を築きつ。入神の絶技眞に生けるが如し。あらず、寧ろまことに死せるが如し。幾よろづ代、彼女が絹の如き囹圄の中に世界をつらみし女神か末期の苦痛をまのあたり見るらんやうに人々戦まごのき慄おそぬ。

この畫に關して、あはれなる一條の物語あり。畫は爲めに數段の光彩を増し、あらしき、やさしき幾千の眼をして時ならざるに露を帯ばしめ、人々か誠ある同情を牽きぬ。ラタン街に數かず多き同窓の中にも、ピエルは絶倫の天恵を持てり。いでや世にもめでたき一傑作を成し了せんかとは彼か平生の望なりき。一念こゝに向ひて、彼はたゞ努めにつとめぬ。それ、これ心に協はで、煙と化したる畫絹の數も丈たけにか上りけむ。彼の夢は常に其傑作の上へのみ向ふなりき。

漸くにして一道の光明は彼に來りぬ。

古よりヴ井ナスの誕生は幾多畫人の心を牽きぬ。されど未だ何人もこの女神の死に思ひ到れるはなし。萬人の心に愛を吹き込むと言ふなる女神の誕生や、さまざまの動作の、かくまでに麗はしく、かくまでに人を動す力あらば、など其死の獨り顧みられずと言ふとあらんや。待て、われ筆を揮つて、彼女が末期の苦痛の中にとこしへなき美を見せん。凡そこの世を住みよくも、うるはしくも、樂しくもする、あらゆる物の死恨と云ふ死恨は、皆我か畫絹に上さでは已まじ。濕ふ眉、かすめる眼、あはれの姿、しまれる筋骨すぢほね、あふさり『パリダモル』の如く麗はしかるべし。我か不朽の名も茲にあり。さはれ何處にかモデル求めん。筆とりてかす試みしかど、一人とし

て彼の興趣をひき起すやうなるはなく、皆彼の夢に協はで已みつ。既にしてロセットは來れり、わだつみの泡の中より生れ出でけん女神の面影。

『わか友、御身はモデルに雇はれんと望み給ふか。されど御身の如きは、幽暗なるべき我が畫に協はず。餘りにも生き生きと、よろこばしげに、麗はしき君かな。如何せん花は死を現はず能はず』

『試み玉へ』と、ロセットの答はたゞこれなりき。かくしてロセットはピエルの爲めに雇はれぬ。彼女はこの世に孤兒みなしごなりき。いかに痛ましき半世なりしよ。處女の嬌羞を強いて抑へて、モデルの女に雇はれんとまでには、そも幾千行の紅涙か、流されけん。『恐らく妾は羞ぢ死ぬべし。あゝよしさらばこの世の苦惱もやがて終らん』

まめまめしくもピエルは其モデルに對してはたらきぬ。筆に従て畫は次第にならんとす。行く行く畫絹の上に現はれ來る己れの姿を眺めては流石にほくえまれつく、ロセットは畫架の前に立ちて、彼の所作を稱ふるなりき。哀れなるかなロセット、彼女はまだ生れて戀と言ふものを知らざりしが、今こゝに立ちて且つ畫き且畫ける若き畫工を眺むるまに、いつしかそは來れり。やさしき光は彼女の眼に燃ゆ初めぬ。されど畫工は知らざるなり。唯認めぬ、彼のモデルの日に日に麗はしくのみなりもてきて、一線一線彼の畫絹に上るを。やさしきまなざし、可憐の姿、さては臆おそしたる嬌羞はにかみまで一々描かれずと云ふことなし。何者の業しわざなればしかく彼のモデルに變化を興ふるや。彼問ふの暇なし。彼の心はねて觸るべからず。頭に充てるは

唯死の幻影のみ、一日、彼れは終に絶望の姿にて其筆を投しぬ。『ロセツトよ、萬事止みぬ。我筆は餘り活氣に満てり。ヴヰナスは死を欲せず、また死すべからず。功名は達し難し。ロセツト、御身はヴヰナスの誕生に向ひてこそ誠にこよなきモデルなれ、其死にはゆめ協はんやうもなし』

『ピエルの君』と處女は彼の肩に柔き手をかけて、『妾とてよく死の姿を真似ねざるをやある。さらば其時、御身はそれを畫絹の上に試み給へ。何事か候べき、みそなはせ』。かく言ひつゝ、處女は麗はしき手を舉げて、脈膊つ動脈を示しぬ。『決して決して妾は痛を覺ねざるべし。小さき傷口つくらば、生命の血流れ出でなん。其の血の流るゝまよ、御身は妾の顔の上に死相を捕へ給はん。さて御身満足し給

ひし後、さなり何事か候べき流れ止めんは易からずや』。

ピエルは首を垂れて深き思に沈みぬ。『御身は能く我が爲めにを爲し給ふにや』。

『さなり妾は嬉しかるべし。御身を幸福にし、成功させまいらすかと思へは猶更に』。

このとき畫工は處女のやさしきまなざしを逸しぬ。よし彼はそを見たらんにも、心には留めざりけむ。ピエル、『ロセツトよ、いかなれば御身はかゝる事爲さんとはするや』……『藝術のためにこそ』笑みつゝ處女は答ふるなりけり。

ロセツトは立ちぬ。生命の血の滾々として紅を流せる前に、天才の狂熱全身に燃えて、ピエルは彼の筆を揮ひつ。彷彿として花の如

き面を滑べれる死相の影を捕へえたり。刻一刻其影は暗くなりまきりて、肉は顫ひ、汗は流れぬ。兩眼には言ふ可らざる満足の光満ちて、かすかに死のまなざしを窺ひうべく、生命の火遠く去りぬ。蒼白の色は健康の花にかはれり。畫工は總てを寫して餘す所なし。今や冷かなる死相は明かに畫絹の面より涌き出でぬ。一たび彼の傑作の前に雀躍して、ピエルは再び筆を探れり。最後の一呼吸をだに逃さじとなり。あはれや低く媚ぶる其息の音よ、夜の鳩のやさしき羽ばたきの如く彼の耳に達しぬ。

畫は成れり。己れの創作に深くみとれて、彼は其モデルを忘れぬ。忽然として慌てふためき、處女の側に走りよれば、冷に靜かなり。流れ盡して血脉空し。ヴヰナスは逝にけるなり。

彼はいとしき死骸を兩手に抱き、慟哭して悔い悲めども及ばず。追慕の情のいとせめては執迷の境に陥り、あはれ覺めよと生なき土塊を撫して祈るなりき。

今も猶彼は叫べり。ロセツトよ覺めずや、ヴヰナスは逝きぬと。日頃望みし功名の獲られし事をも、彼か傑作の藝術界の嘆稱をかひ得し事をも彼は全く知らざるなり。恐らくは永久に知る時なからん。彼の思は物みな忘れて、常にロセツトの上にあればなり。

## 蜜 蜂

“In a Little Body Bear So True a Heart” Ronsard.

耀きたる夏の日を蜜蜂の花に吸ふ有様を見ずや、天地よ何の調和  
ず。

巢の女王なるが故に、蜂はあたりの花園に咲ける花のより、多く蜜  
を持たざりしことを恨めりや。萬物の靈長なるが故に、人は神の下し  
給ひし運命の業わざの已しあわせに幸福薄うすしとて恨むべきや。

\*

終日ひねりす巢すに懸りて身動きだにせぬ蜂あり、渠は蠟を作るにて、其巢の

爲めにはいと貴く、骨折るゝ業わざなり。四十日、四十夜食ふこともせ  
で野にありしイエス、雪山十二年の苦行に涅槃解脱を悟りし佛陀、  
みな我済のために心の蠟を作り給へり。拱手瞑目の間にこそ貴き事  
業はあれ。

\*

愛の神ウラニアンは母なくして生れ給ひ、イエス、クリストは父  
なくして生れ給ひぬ。蜜蜂に Virgin Breeding と云ふとあり、女王  
蜂の雄蜂と接することなくして受胎するなり。

\*

水晶宮の女王の貴きことを知りて、密の宮の女王の貴きことをば知る  
人尠すくななし。

蜂の労働者はみな其一生を處女にて過ごす。労働の處女、聖きはミレーの畫と孰れぞ。

朗らかなる露の朝した、慈悲の大神、鄙の軒端に下りさせ給ひて、奇しくもかすけき密の宮の囁きに耳傾け給ふ。自然の處女、小さき者達、巢の口に寄り集ひて、今日のいそしみ、一日の課業を議るに似たり。路のほとりの馬肥しは白き花着けつらん、河邊の莖晚咲きなれば今もなほ香りてん、隣り屋の百合園今日はも咲かん、つゞじ散りぬれば代りの花求めではなご小言こごめき合ふに、日の光もこゝにはひと際温きやう輝きて、農夫は畑に、蜂は花に、聖き労働の天地、うるはしき神の國！

## 古蹟

### (一)

荒廢斷碁の跡を眺めて、人の心には隱微なる喜悅動く。この情感は、我等の性の脆く變り易きより、また荒れ果てたる記念物と、我等の生との間に隱密なる調和の存するよりして起り來る。なほいかなる國民も、一たび名ありし人々も、我等の暗き命運に宥されたる限を超えては、榮えうるものにあらざることを目證して、塵微の身に限りなき慰藉を覺ゆ。恁くて荒廢の跡は、自然の景物の中に高き道德的印象を賦與し、一たび繪畫に上されては、誰か眼か能く之れに反いて、あだし事物の上に迷ふをうべき。上に耀く日輪を看よ、それも一度

は大空の高きより蹴落さるべきものなるに、焉んぞ人の作爲の敗殘を免んや。蒼芎にそを掛けし神のみぞ、滅落を知らぬ帝みかぜにはあれ。

古蹟に二種あり——歲月の爲したるもの、人間の爲したるもの。

歲月の作爲に關るものは、人に嫌惡の情を催さしむることなし。故いかにとなれば、時の働に伴れて自然の働の行はれゆけばなり。時、荒廢の一團を進めんか、自然は花をもてそか跡に散らさん。時、墓田に一隙を作らんか、自然はその中に小鳩の巢を設けん。常世とこよに再生の事業にいそしみて、死、それをすら、いとも甘美なる生の影もて飾りゆくか自然なり。

人間の作爲に關はる古蹟は、古蹟と謂はんよりは、寧ろ毀滅の跡なり。修め繕ふ力なき全滅の象を面前まのあたり見るのみ。悲慘の遺物、而かも歲

月のそれにはあらで、若者の鬢華に雜れる白髪にもたとへつべし。且つや、人爲の毀滅は自然の敗殘よりも、轉た烈しく轉た全し。後なるは穿鑿し、前なるは打摧す。神、よりよりこの世の荒廢を速めんものと、其鎌を人間に貸すべく時に命し給ふ。時、愕の眼を以て看る。渠か幾代を費すべきものを、人は一瞬にして破滅し了んぬるを。

ひと日、ルキセンブルグ宮殿の背後しうへを歩むことありしに、圖らずもフオンタンが稱揚措かざりし加都仙教修道院の中にと導れぬ。我等の眼に映せしは、軒傾きたる一棟の御寺なり。鉛は窓より剥がれ、戸口は板もて塞がれぬ。寺院に屬せしさまぐの建物も、今は影だに留めず。多時、我等は地のそこ、ここに散らされたる黒き大理石の墓石の間を縫うてさ迷ふ。ある物は粉ごなに碎かれ、ある物はかす



かに碑銘の跡を留めつ。なほ奥深く庵の中にと進みければ、高く生  
ひ茂れる草原の中に、二株の野生の李立てり。壁にはサン、ブルノ  
一の事蹟を書けるか半は消え残り、寺の片傍には時辰儀の板も見ゆ  
めり。昔は逝きける者の譽に、平和の讃歌弾きもしけん禮拜堂よ、  
今は墓石を斫る鋸の音のみ響きける。

傷心慘として、わか足いづこにか向きけん。心落ちおてみれば、  
城外に立てるなりき。日暮れぬ。淋しき街の兩側に樹つ高き壁廓の  
間をさ迷ひ行くに、忽ち我耳をかすめてオルガンの響聞ゆ。程近き  
御寺より起る勝利の讃歌、

*Laudate Dominum omnes gentes.*

これは是れ『コルパス、クリスチ』のオクタープ。かくも尊き調べを

耳にせし時の我等か思は心も言葉も及ばず。御空に聲ありて言ふに  
似たり、信心薄き輩よ、望枯れし者の如く何をか傷む、我をも  
亦爾の徒と等しく、心變り易き者と想ふかや。罪するか故に、棄て  
もすると想ふかや。我が企を糺すを已めよ。荒廢のもとにも我か慈  
悲の手を讃する敬虔の下僕にならへと。

足を進めて寺堂に入れば、一人のみ僧ありて禱を上げぬ。老ひた  
る人、貧しき婦、幼き者皆膝まづきぬ。我もまた平俯して、涙禁め  
あへず。心の底よりかくは曰ひぬ。『許し給へ大神、我等は卿の寺の荒  
廢を見てつぶやきぬ。我等の過ぎたる理性を許し給へ。人は自らに  
して荒れ果たる住家ならずや。罪と死のすたれ、其冷えたる愛、そ  
の脆き信心、其狭き慈悲、飲けたる情け、損ねし想ひ、破れし胸――』

要するにみな荒廢の跡にあらずや。

## (二)

景美の點より察するも、荒廢たる古蹟は完璧の記念物に比して、神秘の趣に富みたり。『時』の手の未だ振はれざる寺院に往け。爾の眼は四壁に遮られて、四邊の景色も見えず、連柱、せりあち迫持など辨わかち難かるべし。さるにこの御寺一たび荒れ損じなば、何物か餘さるべき。堆き殘廢の間、頭上に、遠き彼方に、たゞ視るは星と、雲と、山と、川と、また森とのみ。光線の自然理より、地平線は遠かり、氣中に懸れるかすくの樓閣は、空と地とを背景となせる一幅の活畫に異ならず。

古蹟はまた其建築の様式により、其建てる場所によりて、あたり

の寒景と特殊の調和を保つ。

牧草薺などに乏しき熱帶の地にありては、我等の邦にありふれたる、ゴシック式の邸宅、または古城を飾れる如き草木の眺なけれど、偉大の植物はそが建築物の重々しき様と親しみ深かり。パルミラに行くに、棗の枝は『日の御寺』の柱に立つ人身獅子の立像の頭を被ひ、棕櫚の幹は朽ちたる柱に代り、昔びとの貴び崇めし桃の樹は『沈靜』の胸に榮えぬ。ことにまた爾は亂れたる葉、疊々たる菓實もて、あたりの荒廢といみじき調和を保てる他の樹木を觀るを得べし。カラバンの一隊偶々この古蹟のもとに憩ひては、更に一段の風致を添ふべく、東洋風の嚴かなる服装は能く荒廢の威嚴と一致し、殘壘堆積の間に安らひて、僅かに其頭と其背とを現したる駱駝は、居

常にも増して幹驅の偉大なることを覺ゆぬ。

埃及の古蹟は風趣更に異り、狹き境地の間屢々異種の建築を包擁するを見るべし。古代埃及式の柱は、幽雅なるコリンス式の柱と隣り、タスカニア式の一棟、アラビヤ式の塔と接して建ち、遊牧時代の記念物は羅馬の代の工作と對しぬ。スヒンクス、アナピスの破像、さては方尖碑の碎片など、ナイルの流に轉び、あるは稻田麥圃に半は埋れつ。今夫れ秋水到らば、田畝海と化して、是等の記念物は一大艦隊の遊戈するか如く、雲、波と注ぎては、塔も半ば斷たれぬ。空洞なる台石の上、豹は其首を伸す、牧牛の頭捧げたるパンの半身像の後へ。羚羊、駱駝、紅鶴、飛兔は躍る荒廢斷礎の間。

テンペの谷、オリンパスの森、アチカ、ペロポンネサスの丘、い

づこに往くとして、希臘の記念物が散らざらん。蘚、蔦かづら、岩ばななどあたりせきまでに繁り盛ぬぬ。年經りしビナス、茉莉の花輪を帶とし、白苔の髻、ヒーブの頤に懸れり。ニモシンの書よみの葉々に、瞿粟の芽ばれたるは、この教の昔榮えて、今捨てられし表象のいともいみじきものにあらざや。台傾きたる前廊のもと、寄せては消ゆるユージアの海、憂を帯べるヒロメラの歌、嘆聲いや重きアルキオン、祭壇のほとりに鈴振るカドマス、レダのもすそに巢作る燕——凡そ是等のもの相寄り相集りて、この歌の如き古蹟に微妙の韻致を注ぐものは、『幽雅』のなせる仕業にやあらん。當に言ふを得べし、聖息猶アポロ、ミューズの御寺の塵に通ひて生氣滿つと。

## (三)

基督教の記念物は幽雅の度をさく、希臘羅馬のそれと比肩すべくもあらねど、猶其他の點に於て優に是等のものと拮抗するに堪へたり。このたぐひのいと優れたるは、英國特に北方の地、或はカンバールランドの湖ミテラウミに近く、或はスコットランドの山、オルクニーの島々にすら散見す。誦臺の壁、尖拱の窓、彫物したる穹窿、精舎の方柱、樓塔の殘碎など、最も時の手の掠奪に堪へて久しきに亘れり。希臘式の建築にありては、天上とアーチとは蒼穹の曲線に平行して造らる。之か爲め暗色の雲空を覆ふ如き天候に際し、または蒼然たる薄暮に當りて、是等建築物の外形は空色の中に沒了せらる。然るにゴシック式にありて、其尖頂は穹窿の圓形及地平の曲線と遍ねく對

照す。而してまた空虚多きゴシック式は、充實したる希臘式に比して、牧葉草花の茂生に便なり。臺傾きたる柱、葉の形體なりに曲り、または籠の如く鑿られたる圓頂額は、風の塵と與に草木の種子を送るにこよなく適かなひたる畝ならずや。にらねぎは膠泥シッコウイに纏はり生ひ、苔はその力ある根もて荒れ朽ちたる柱に縋り、薊あざみは窓口より褐色の耳珠たぶ見せ、常春藤キゴトは庵室に沿ひ繁りて、アーチのまはりに花飾りす。斯の如きは他の古蹟に求むべからざる雅趣あり。今し風と嵐の最中なか、オシヤンの歌ひけん海邊にして雲ただならぬ空のもと、威けくも雄々しき是等のゴシック式記念物に對する時、人はシナイ山上に神を想はん。旅びと閑に杖をオルクニーの島々に止めて、礎危き祭壇に座を占めば、蒼然たる哉滿目の荒景、海は怒り、霧は慌たゞしくも

簇る。見渡す谷々に墓石高まり、荊棘いばらがもと小流せらぐよ。赤松兩三株あり、荒れし小枝に消え残りたる雪の亂點するなど、眼に入るものとはかゝるを出でじ。風茫々として古蹟の間を渡れば、無數の孔隙一時に嘆聲を昂め、圓頂額上に草亂る。圓頂額のかなたには、碎雲一片、海鷺兩三羽。海路來て迷ひし船の滿帆に風を孕みて、體も得見えず、大海原の胸にたゞよふは、水精の其羽を展ばすにあらずや。人氣ひとけ遠きこの海べにぞ、波にかくるゝ『智慧』貴びしあまたの人々は逝きつれ。あるときは肅嚴なる一隊をなして、岸に沿ひつゝ讚美歌の音に伴れて歩みしこともあらん。

そのかひな遠くひろげて、  
うみこそは限り知られぬ。

またある時は波打寄するフィンガルの洞窟に座して、その昔約百に下りし天上の聲、『そか破れ出づるとき、誰か海の戸を閉さん』と云ふを耳近く聽き得じと思ひつらん。夜は嚴冬の北風地を掠めて、孤塔のあたり水烟の覆ふ所となれば、平和の隱士等堅く戸を閉ぢて、嵐の叫を耳にしつゝ、不窮なる主の舟に楫したる身の幸福さいわひに、安き睡を追ひやしけん。

聖淨なる基督教の記念物よ、爾は他の古蹟の如く碧血、不義、横暴の跡を留めずして、只平和の歴史、若くは人の子の神秘なる惱を談る。また爾神聖なる隱者よ、他に幸福の一角を求めて、極の氷の中に爾を閉せり。爾は今爾の献牲の報果を悦べり。今若し神の御使のおます天上にも、この地と同じく住はれたる沙漠、荒寒の一隅あ

りこそせば、かここにて閑みさるべき聖淨の孤獨、朽つることなき幸福を庇護すべき孤獨は、疑もなく今爾の擇びつるものにぞある。

(Génie du Christisme の一節)

### 戀

廣き此の世をたゞの一人ひとに縮め、たゞの一人を神にまで展ぐるは戀なり。

戀は星に對する天使の敬禮なり。

\*

戀故に悲む心はいかにか悲しかるらん。

\*

まことや愛人は神なりといひけん。世はたゞ一人と思ふ人の留守よ。いかに寂しきものぞ。父なる神にしてもし明かに靈のためにこの世を造り、愛の爲めに靈を造らざりせば、人皆神を私ある者と思はん。

\*

花飾せる白き縮緬の帽子のもと、笑みの一微光は、よく夢の樂園に我心をさそふに足る。

\*

神は萬物の背後にあり、されど萬物は神を隠くす。生なきものは黒

く、生あるものは暗し。戀すれば彼女を透明にす。

\*

思にして祈なるものあり。身の態度のよしいかにもあれ、ある時は心膝まづく。

\*

離れたる戀人はよろづの幻影を描きて己の孤獨をあざむかんとす。逢瀬は断たれぬ、文のたよりもならずなりぬ。されど彼等は猶幾多あまたの妙へなる交通法を有す。鳥の音、花の香、穉子の笑、日の光、風の呻き、星の輝き、よろづの物皆彼等の使なり。神の事業は皆戀の侍女をもとなり。戀はあらゆる自然を其使者となすまでに有力なり。ア、春よ、なれば我が彼女に書く文にあらずや。

\*

未來は想よりも寧ろ情に屬す。永遠を領して之を充すことを得るものは唯戀なり。限りなきものは盡るなきものを要す。

\*

戀は靈の一部なり、靈と戀とは同質のものなり。同じく聖き光なり、同じく純潔なり、不可別なり、不死不滅なり。戀は我等の内部に燃ゆる無窮の一點火なり。何物かよく制するを得ん、何物かよく滅するを得ん。我等は其火の我等の精髓にすら燃ゆるを感じ。我等は其火の虚空の深淵にすら照り輝くを見る。

\*

ア、戀よ、談合親かたらいしき二つの心、入りまじる二つの胸、かたみにか

はず二つの眺めの崇拜の光よ。『幸福』よ御身は我を訪はん。ある時  
 我は夢みぬ、『時』は天使の身より洩れて、我等の運命を過ぎんがた  
 めに、この下界に降り來りぬと。

\*

かたみに戀する二人が中に、神はより多くの幸福を加ふる能はず。  
 唯是れに限なき持續を與ふるのみ。戀知りそめし曉より、戀の永續  
 は次第にまさん。されど戀が此世に與ふる言ひ知らぬ幸福は、神と  
 雖もそを増すに由なし。天にありて豊かなるものは神、地にありて  
 豊かなるものは戀。

\*

君が星を眺むるに二つの動機あり。そは輝く故に、そは究め難き故  
 に。君か傍により柔しき光體、より大なる秘密あり——そは女なり。

\*

誰にまれ、我等は皆我等の呼吸すべき輩をもつ。彼等なきは空氣な  
 きなり、我等は窒息して死せんのみ。欠戀の死ほど恐しきものはなし  
 ——そは靈の死なればなり。

\*

戀が二人を天使の如き聖き調和に結び融かすとき、人生の秘密は彼  
 等にひらかる。この時彼等はたゞ同じ運命の二項なり、一つの魂の  
 二つの翼なり。戀は飛ぶよ。

\*

一人の女君が前を過ぎるとき光を滴たらず日は、君なきなり、君は



戀す。この時君はたゞなすべき一事あるのみ、そは彼女をして君を  
思ふの已むを得ざるに至らしむるまで、熱心彼女を思ふにあり。

\*

戀の初むる所のものは、唯神によりてのみ完ふせらる。

\*

誠の戀は失はれたる手袋よりも、見だされしハンカチーフよりも、  
深き失望と深き驚喜にあり。戀は其敬虔と希望のために永遠を要す。  
戀は同時に無限大と無限小より編みなさる。

\*

君もし石ならば磁石たれ、君もし人ならば戀にてあれ。

\*

戀を満足さすべきもの一もあることなし。幸福を得て樂園を望み、  
樂園を得て天を望む。

\*

かたみに戀する二人には何事か缺けたらむ。戀は天の如き幽思をも  
ち、天よりも多くの情愛沿へる歡樂をもつ。

\*

戀の情は小兒の如く、よの常のあだし情は小人の如し。人をして小人  
ならしむる情の上に耻あれ。人をして小兒ならしむる情の上に譽あれ

\*

現つし世に奇しきものあり、君知るや。我は今常闇とこやみの夜にあり。あ  
る人逝きぬ、彼女は天を荷ひて去れり。

二人手をとりて同じ奥津城に並べられ、常闇の中に静かに彼女の指を抱かば、我か永遠は満ち足りなむ。

戀故に君惱まば更に戀せよ、戀ひ死ぬは戀に生くるなり。

戀てふ十字架の上には明暗の光相混ず、そこには苦痛の中に歡喜あり。

ア、鳥の歡びよ、彼等にはうた歌ふべき巢あればなり。

戀は樂園の空氣を吸ふ天上の呼吸なり。

深き胸、賢き心は神か造り玉ひし如くこの世を送る。そは長き審問なり、測り知れざる運命さだめの測り知れざる準備なり。この運命は誠のものにして。第一步を墳墓に始む。その時あるもの彼に現はる、彼は有限を思ひそむ。有限——請ふこの語を思へ。生者は無限をみる、有限はたゞ死者にのみ現はる。生きとし生けるものは戀ひ、苦み、望み、思ふ。ア、されど、唯々肉體と、形と、姿容にのみ戀ひあくがれしものは禍なり。死は彼等より之等の凡てを奪ふ。心を戀せよ、君は再びそをうべし。

我嘗て途上、戀に落ちたるあはれなるある若者を見ぬ。彼の帽は古

り、彼の衣は裂けぬ、肘にはそこそこ穴明けり。水は彼の靴を通して入り、星は彼の心を通して入りぬ。

\*

愛せらるゝは何の偉大ぞ、されど愛するは更に何の偉大ぞ。熱情凝りて心ヒロイックとなり、渾身これ純潔、渾身これ崇大、汚れたる思想は氷山の上の草ほどにだに存せず。世の常の感情を雑へざる氣高くも静かなる靈魂、雲をこへ、この世の影をこへて、暗愚、憎怨、虚飾、不幸の上に高く天に沖し、恰も高山の頂か麓の震動を感じる如くに、亂れたる地上の運命さためを俯瞰す。

\*

世の中に戀せし者なくば、かの日輪は消滅せん。

## 痴情偈語

\*

若き戀は花に宿る蜂の如し、久しく停ることなし。

人は驚かされたる神なり。天上の性（たとへば戀の如き）を現すときは、他人に知らるゝを忌む。

\*

死と雖も戀の不安を醫する能はず、手に手をとりにて桂川の淵邊に臨みし梅川忠兵衛の心の中にも打解けぬ謎は有けん。

戀は其證據を涙の中に求む。

\*

戀の餌食は涙なり、聖き悲もて飼はれざる戀は乳なき小兒の如く生くる能はず。

\*

嘗て君を笑はせし女と、嘗て君を泣かせし女と、孰れが深く君の記憶に残れるや。

\*

アラス！戀は泣くなり、泣きつゝ其鎖を結ぶなり。

\*

やさしき残酷は乙女ぞもてる。

\*

人は戀す、故に人の性はもと善なり。

\*

遺傳も進化も戀のひそめる心の奥まではえ犯さず。我は戀すここに我は二千年を若やぎつ。

\*

且戀し、且悲しみうるものは幸なり。人はこの二つの光によらずんば眞理をみる能はず。(ユーゴー)

\*

いかなる聖人君子の高級思想も、我が愛する乙女の彼女の髪を飾れ

るリボンに就て談れる、さくやかなる不平にだに及ばず。

\*

非收絶艶美人涙、安解俊傑豪士憂。(中野逍遙)

\*

女の胸に休息所をもたざりし人に、未來の眞意義の嘗て解かれしことありや。

\*

苦酸なる閱歷と、萬斛の涙によりて漸くあがなひ得たる運命の意味を、戀は一夜に教ふ。

\*

人の心には二つのうるはしき花あり。他人の爲めに濺ぎし涙の雨に

よりて芽ぐみし者をヒューマニチーと言ひ、己の悲にうながされたる涙の雨に養はれしものを戀と言ふ。前なるは白き花なり、後なるは紅き花なり。ともに好き實を結ぶ。

\*

美は喘ぎなり、戀は喘ぎなり。

\*

人を満足せしむる詩は詩にあらず、人を満足せしむる戀は戀にあらず。

\*

まことに自然の囁きを聞かんとならば、先づ戀せよ。

## 『ポール、エ、ヴィルジニー』

『ウエルテルの悲』を懐いて埃及遠征に上りし奈翁に愛讀せられ、『コスモス』の著者フンボルトが亞非利加の旅に伴はれてまたなき愉慰者となり、ラマルチンの作物に現れては可憐のグラジュエラを泣かじめ、シャトールブリアンの眼に映じては基督教の精隨となる。抑もこの一小篇にはいかなる靈魔あるに自りて、しかく天下の人心を惱殺せるや。

仰げは天は覆ふこと濃かに、俯する地は載すること厚し。辰星の雲に映ずるは何の壯んぞ。河川の白く流るゝは何の潔さぞ。鳥啼いて朗らかに、花開いて淋し。自然の人事に涉ること一に重きや。是るによりて、古より情厚之詩人、思を山川の風物に馳せ、懷を花鳥の韻事によせて、妙法善美の境に逍遙遊せしもの概ね然り。春を愛せし者あり。夕陽の景を歌ひし者あり、聖者は紡がざる野の百合に萬法を觀じ、或者は逝ひて歸らざる戀人の墓に、せめては春は一もこの莖咲かばやと冀へり。されば焉れの國、焉れの時代の詩人をとるも、その人が自然崇拜之左券として、二三讚美之句を提げ來るに此の勞やあらん。沙翁、ラシーヌよりバインス、ウォーズワルスなど言はずもあれ、プラトン、ベーコン、フェヌロンなどの哲人に到るまで、焉れが自然の謳歌者ならざりける。洵とに何處にか全く自然美を除却し去りたる詩美を見うべき、また何處にか自然崇拜を

雑えざる宗教と、哲學とあらんや。

然りと雖もジャン、ジャック、ルッソー現れ、ブフォン現れ、サン、ピエル現はるゝまで、自然崇拜は他と其形相を別ち、其狂熱の度を昂むるまでには到らざりき。聲高く自然主義を標榜し、偏に山川の美と、原人の純に謳歌し、務めて自然の研究者と爲り、造次も草木辰星より眸を外視せず、宵旰たゞ天地の赤兒となりて、遁世の趣を喜びしは實に渠等に創まれり。自然に歸れと呼ばはりたるルッソーの叫は、やがてこの派の初聲にして、同時にまた自然主義者が『マグナ、カータ』の第一條とは成りしなり。特に我等がサン、ピエルに喜ぶものは、ルッソー、ブフォンに繼ぎ出で、而かも渠等の亞流を汲まず、同じ自然主義の旗旆の下に、従順なる戰士として、なほ能く

別乾坤の開拓に従ひ、またく清新質實なる情調を漾へたるにあり。想へ、海の濶きにも、空の限り知られぬにも、または一もこの花にも、自然の美は充ち満ちたらずや。ピエル憧憬の眼を昂げて、殆んど身の措く所を知らず、誠に自然の多様にして、人智の限り薄きを慨き、朝まだきに露を分け、夕は星に思ひ痛みて、とつ國の旅寐の間もひたすら自然の研究を忘れず、初めは心に定むることありて、其観案の終りを告ぐるまでは、著作に筆を染めじとせしが、愈入りて愈深き自然の道奥は何の所にか其畛域あらん。詩人、天才の燈し火を擡けてこの迷宮を辿るも、最後の神扉に達するには燭足らず。則ち人力の限りあるを嘆じて、『我は貝がらにして砂上に掘りし穴に、大海の水を受けんとする小兒に似たり』と言へり。渠は復言を卑くして、自然史の全部

は愚か、一植物のそれすら己の才能には超えたりとまで自遜しつ。  
 今按ずるに、サン、ピエルの自然は、譬へば、暮行く夏の野邊の  
 如し。柳垂れ、林檎實りて、終りの蝶の初つの葡萄と親しむ趣あり。  
 日は輝けど。鳥は啼けど、百花の繚亂たるはあれど、自から近づく  
 秋の淋味あり。ルッソーのそれは破壊的なり、トロローのそれは野獸的  
 なり。渠にはエメルソンの冷靜なく、ウァーズワルスの隱逸なく、  
 シヤトープリアンの憂愁も缺けば、バーンスの飄逸も缺きたり。そ  
 の昔アラビアに一神話あり、造化は薔薇の色を白妙に造り給へり、然  
 るに露の朝をいざ是より咲かんと云ふとき、アダム來りて窺ひけれ  
 ば、薔薇は羞らひて其頬を紅させり。恰も好し、サンピエルの人  
 事を語り、自然を寫すや、正にこの神話に似たり。渠はあくまでも原

人の素樸を愛し、靜平純雅の自然を慕へり。狂風怒濤は渠の靜耳に  
 は餘りに恐懼にして、巴里街頭の忙鬧は渠の眼にはいと更に苦惱な  
 りけん。ココア實り、レモン花咲き、風も常に温かなる熱帶の地に、  
 遠く世を離れて聖き戀を囁く原人こそ誠に渠の理想とする所にはあ  
 れ。……此の如くして『ポール、エ、ヴィルジニー』は成りぬ。

ベルナルダン、ドー、サン、ピエル（一七三七—一八一四）の一  
 生こそ淋しけれ。狷介は渠の質なり、落魄は渠の生なり。自然を愛  
 し、禽獸を憐む程のやさしき情はもち乍ら、一日もこの世に安宅を  
 求むる暇だになくして去りぬ。海に行いて職を求め、工師となりて  
 平かならず、傷いて歸れば家人よりは冷かに待遇され、則ちルッソ  
 ーが其困危時代に樂を教へて活を得たる故智に倣ひて、數學の家塾



を開いて復失敗に終りぬ。復和蘭に去り、復露都に入り、フィンランドに戦ひ、ビエンナニ歸り、或はプラトールを學んでアラル湖のほとりに共和國の建設を企て、或は慨然として波蘭の革命に投じ、倥偬として寧日なく、半生席暖ることも莫かりき。狷介卒直の性は虚飾多き世と容るべくもあらず、憧憬の眼は常に自然の間に馳せて、自ら世と遠り、加ふるに、身世頗る數奇にして、行路の轉た蹣跚なるあり。渠か世の文明を嫌ひ、社會の偽善を惡みて、自然と禽獸との間に其情熱を放ちしもの洵に所以あるかな。

何ぞ況んや、渠をして偏にこの情僻に歸趣せしめしもの、他にまた<sup>こころわり</sup>理あるをや。形成世にもまれに麗しかりし渠は、一たび露都にありてカゼリン二世の爲めに思はれたり、去て波蘭に行くや皇女マ

リーいと迫めて渠を慕ひつ。然るに情交轉た切ならんとして、一たん皇女の母の距つる所となるや、則淒涼の懷を抱いて故土に赴きしが、幽夢に戀々の情を禁ずる能はず、渠の足は再び波蘭に向へり。さるに看よ、皇女マリーは夙く心變れり。渠女は昔の戀人を指して闖入者なりとは嘲りぬ。當時の渠は煩ひ惱みて、殆んど昏迷擾亂せり。渠が其友に送りて波蘭に別るゝ詞に曰く

ア、さらば印度の寶よりも猶貴き友どちよ、ア、さらば北の國の森よ、我は再び爾を見ざるべし。情篤き友よ、なほうれよりも親じかりつる昔の情よ、——醉ひし日よ、樂みし日よ、さらば、さらば。我等は一生を死すべく、唯一日が生くる。

洵に戀は惱めど、戀の茶毒をうけざる者は幸なり。あはれなるサンビエルは戀に破れて、益々淨き戀を念ひぬ。渠は現實界のはかなき

を知りて、愈よ理想の夢に耽りぬ。此の如くして、渠は作中のヴィルジニーに一腔の同情をば寄せつるなり。此の如くにして渠は益々人間社會の厭ふべく避くべく、自然の愛の盡きず、變らず、原人禽獸の生の欽羨に堪へたるを念ふて已まざるまでに到れるなり。

世に捨てられ、世を捨て、懊惱煩悶の極みを盡せし渠は、他の著作の間に當年の身を悲み語れり。『我は劇しき病に犯されたり、焰の流は電火の如く我眼前に閃けり。渾ての物我には二つに見え、また振ひて見えぬ。ユーディバスの如く、我は二つの日輪を見たり。……朗らかなる日、小舟に乗りてセーヌの流を横るにも、我は堪へ難き苦惱を閲しぬ。公園を漫歩きして、小さき水溜に逢へば、劇しき痙攣と恐懼の念に襲はれぬ。多くの人の集ひ合へる園の中をば、我いかにしても

横ぎる能はず。若し其中の一人二人此方を眺むるものあれば、我は直ちにそれ等の人々は我を嘲りつゝあるにあらずやと思ひぬ』と。幼くして神経質なりし渠は、世の迫害に逢ひて、愈よ其不幸と悲の芽をばはぐくみ育て、自ら掘りし穴に自ら溺るゝまでの痴態をば演せしなり。悲しきは天才の閱歴にして、苦がきものは俊髦の行藏にこそあれ。然りと雖も、この閱歴この行藏は、天のものなり、不朽のものなり。人間によりて點せられたる火のなかには、孤り聖なる光を放つは是れ。今看よ、Genius is an immens Capacity to take pains と道破しけんカーライルの小偈語は、洵に天才の生命なる悲愁の<sup>ことわりの</sup>理を盡せしものにして、サンピエルの一生も亦その例に漏れざるもの。渠が不朽の大作『ポール、エ、ヴィルジニー』は實にこの懊惱期に於て

産み出され、灼々たる詩焰の中に、社會に對する理想をも寓して、併せてヒューマニチーが苦酸の過程に、一臂の力を藉したるなり。

『ポール、エ、ヴァルジニー』の現はれたるは革命に先つこと兩年、一千七百八十七八年の交にあり。是より先き、サン、ピエルは工師の務を帯びてアイルド、フランスに航し、深く其土の自然を學びて歸りぬ。ポール、エ、ヴァルジニー』がこの旅行に負ふこと尠なからざるは、著者の序言にも見ゆる所、佛蘭島航海記に現はれたるくさぐさの材は、うるはしき想像に飾られて再びこの物語の中に實りぬ。南洋熱帯の風物のいかに精細に、豊富に、描寫されたるかは、親しく實討し來りしフンボルトの證明を俟ちて明かに、たゞこの科學者は二三の謬を指摘したるに止るのみ。

ポルト、ルイに近き一小丘に滿眼の清福を領して、左に『死の灣』を望み、右に『不幸の岬』を眺めつゝある瓢零の遊子が、不圖も白髪の老翁にめぐり遇ひて、こゝに一條の實歴を聞くをこの物語の發端とす。身は名族の家に育ちしか咎に、父母の許を得ざる戀人と走りて、而も早く其夫に死別れたる寡婦と、道ならぬ戀とは知りつゝ、言ひよる男の種を宿して、薄命にもそがまゝに棄てられたる一少女とが、不圖も南洋の一孤島にめぐり投ちて、二三の黒奴を使役しつゝ、こゝに淋しき生計を立つるがあり。一方より生れし女子をヴァルジニーとよび、他方より生れし男子をポールとよべり。二人は幼少より早く睦び合ひて、夜毎一つの搖籃に相抱いて寐ぬ。漸く長じて渠等は清福なる自然兒となり、森に憩ひ、泉に汲み、花に濺ぎ、鳥に飼ひ、自ら慈

悲の心も覺<sup>ホ</sup>け、自ら神の愛をも知りて、一期の春も盛りなる頃とはなりぬ。時にヴィルジニーは其叔母なる貴族にめされて、巴里の都に豪華を盡しうる身となりしが、南洋素樸の生活のいと迫めて忘られず、母を慕ひポールを戀ひては、焦眉辭せざる迄に思ひ迫り、走卒使船に託して、また海に浮びぬ。然るに風雨あや憎にして、破船の災に遇ひ、渠女の身はうつ蟬の殻となりて、戀しき岸にたゞよひぬ。ポールも亦慟しみ哭して、あへなく其後を尾ふと云ふか老人の物語りし筋なり。老人はもとその一家の隣に住ひて、常に相往來せしもの、今この丘にそのかみの紀念<sup>かたみ</sup>を撫して、且語り且つ慨くなり。

サン、ピエンが作者としての成功の度を議するは餘りに熟したる問題に屬す。渠の一生の明に語る如く、渠の作物は皆其の閱歷の所産なり、天才の麗はしき想像の翼はよし南溟までも張られたりとも、常に事實の土臺を逸することなかりき。筆を啣んで瞑目する渠の前には、過古は長き透視畫の如く、うるはしき遠景を描いて、その想像の泉に不斷の水を資みぬ。渠の嘗てベルリンにあるや、可憐の一少女ヴィルジニーと相約せしが、資足らずして果たさず。甘き思ひ出は溢るゝ感謝となりて、其作のヒロインと化しぬ。またかのポールと云ふは、其幼き折、同じ宗旨の御寺にありて、互に睦び合へりし友がきの名なりとか。其名の主人<sup>あるじ</sup>のかけても、半世期を通じていたく持て囃されたる教名の始祖となり、盡未來の際までも、己れの名の世界の隈々より應呼せられんとは思ひかけきや。

サン、ピエルの材を擇ぶや、いたく幸福なるものありき。『ポー

ル、エ、ヴィルジニー』の内容は一點半點の微細に到るまでも、全く作者の獨創に成り、絶へて前人の蹤を襲踏したる影を認めず。剩へ、後世に幾多の模倣者を出し、六種の改作となりて舞臺に上されたる程なりき。凡そ不朽の大作を後昆までも垂れんと思はん程の者の、心地に烙して忘るべからざる第一の祕訣は、能く己を知りて、材を擇ぶの宜しきをうるにあらざるべからず。サン、エ、ピエルはこの點に於て、運命の配濟に従順なる羊なりき。『ポール、エ、ヴィルジニー』は全く渠の壇場にして、己の長所を盡すに於て餘蘊なく、短所に吝かなること此作の如きは稀なり。著者の性格と作物の内容とが、かくまでに調和し、一致したることは、永く後の世の騷人雅客をして欽羨に堪えざらしむる所なるべし。

我はこのさくやかなる草紙に於て、多大なる企を起したりとて、謙讓なる言葉のもとに著者の抱負は洩されたり。『我等の詩人は長き年月、小川の邊り、牧場のなか、山毛櫨よなの樹蔭に渠等の戀人を据ゑぬ。我は海べ、岩が根、さてはココア、バナ、又は花咲くレモンの蔭に渠等を据ゑばやと思ふ』と。最後の人形を手ばなしたる乙女の、まなぐら若き母となりて、眞そのいとこし兒を抱けるそれにも似て、ロビンソンクルーソーの物語に幼き胸を躍らせたる我等が、年經て後、やさしき詩人の手になりたる異邦の物語に接したる感想こそ嬉しけれ。トルストイ翁の『コサック』を讀みては、サイベリアの森のいかに靜かに、コサック乙女のいかに麗しかるべきかを想ひ、『ポール、エ、ヴィルジニー』を繙いては、洵に南洋の風物の光淋、抱一が卷繪にも増して

さららかに、昔アダムの榮にしエデンの園はこゝぞと迄に疑はれぬ。  
南洋、人氣なき深林のたゞずまのいかばかり幽邃なるかを看よ。

我門かどを流れて、一直線に森の中に入れる小川は、あらゆる樹もて蔽はれぬ。護謨あり。黒檀あり、オリブの樹あれば、肉桂樹あり。所々には棕櫚も枝を雜えて、其はだかなる幹は百尺も高く、頂には葉の房の冠つけて、他の樹々を掩ふさま、森の二つ重りし如し。互に交す枝と枝は、こゝに廣葉の迫持せりもち作り、かしこに緑の天蓋つくりぬ。多くの樹は皆よき香を吐きて、森をよこざる旅人の衣に其うつり香は幾とせか消はざらん。時しくれば惜氣もなき百花のたゞすまぬ、森の半ばは雪の景なり。夏も終りに近けば、名も知らぬ鳥々より旅鳥の急ぎ來て、木の實、穀物など啄むあり。輝く羽は日の光に褐色帯びたる嚴かなる森の色と映じて、際立ちたる比較をなしつ。鸚鵡、青鳩なども雜りぬ。森のあるじなる猿は、暗き枝々に戯れ遊ぶを、其毛の灰色して緑がかりたると、其顔の黒きより容易く判ち知らる。あるものは尾に

て下り、空に身をふるもあれば、或者は腕に若猿を負ひて、枝より枝に跳り狂へど、しいたげの銃の音はまだ一たびも是等の自然兒を驚かさず。洵に聞ゆるは、たゞ喜の響のみ——うは南の國より來し鳥の、珍しき鳴音の森に響きて、遠く繰回さるゝなり。泡立ちて岩床を流るゝ水は、森に濺ぎて、かしこ、こゝ透れる面に草木の影を雜に、たのしき住びどが行樂の姿をも浮べぬ。うこより數千歩にしてあまたの飛瀑あり、玉の如く落ちぬ。噪げる水の亂し來る響は、森のそよ風に誘はれて、遠く沈むかと思へば、また近く高まり、御寺の鐘かともあやまたる。

全篇に亘りて、記述の精細なる概ね此の如く、一禽一草の些末に到るまで、描いて密やかならざるはなく、寫して麗しからざるはなし。故島の戀人に董の種を送れるヴィルジニーが『この草は墨紫のちさき花を著け、やぶの下に隠るゝを好めど、廣く散る其香にたやすく知らる』と言へるは何のやさしさぞ。四期吹きすさぶ東南の風も

断えて、地は裂け、草は腫げ、谷川も大方枯れ果て、海も涼しき雲を孕まず、晝のまは砂の大柱空に懸り、夕暮は地の醸したる蒸氣に大火の影を忍ばしむると謂ふ熱帯の夏は「汗にしみたる家畜の喘ぎくく頭を天に朝げて、其凄しき吼りは谷毎に響き渡り、息の根をどめしむるやうなる大氣のいづこも、人畜の血に乾ける小蟲の物うげなる羽音を聞くのみ」とは何たる荒涼の様ぞ。

サン、ピエルは生れ乍らにして自然主義者なり。渠は七八歳にして園を耕し、花を植ゆるを唯一の樂となしぬ。漸く長じて書を讀むことを覺けし頃の渠は、ロビンソンクルーソーの物語に寢食を忘れぬ。事物の自然を慕ひ、人工の華美を惡み、禽獸草木の生に多大の趣味と

同情とを願ちたるは渠の幼時なりき。この情僻は長ずるに及んで愈よ顯著なる相貌を呈し來りぬ。渠は殆んど原人の單純なる心を以て、人と自然との間に區劃を立つることを好まざりき。ポールとヴィルジニーとはたゞ牛乳と卵とを以て日常の食物となしぬ。そは鳥獸の生を損することなくして得らるべきものなればなり。渠等か野邊の晝餐にしたゞめられし菓實の核は、必らず柔き地の下に埋められぬ。やがて實らば、旅人と鳥とに甘き汁を供せんとなり。いかに泉のほとりに、ヴィルジニーの來て蒔く餌食を俟てる小鳥をみよ。いかに山のあなたに、ポールの後りへに走れるフィデル（犬の名）をみよ。アア自然兒、爾曹の足は常に履なくして柔き土を踏みけるよ、野邊の夕立に一傘を別ちて、レダの子供を學びし爾曹の智慧の聖かりしよ。

初めて其父に伴はれて都に出で、大寺の塔を指されて、神よ、いかに高く渠等は飛ふよと叫びしとて傍人に笑はれたる幼児は、其塔を見ずして、塔の頂に巢ひし燕の飛べるを見しなり。この幼な兒は愈々長じて人工の記念碑を卑み、自然に順へる生活を尊崇する傾向を増しぬ、羅馬の凱旋門をも容赦なく破摧せしむる自然は、貧しき一少女の形見を森の中にはぐくむとは渠の誇にあらずや。サンピエルの自然主義は殆んど太古の純を存し、エデンの園は渠か理想の生活なりき。ここに『ポール、エ、ヴィルジニー』の一節を引かしめよ。

渠等の生活は自然の運行によりて整理され、日常の談話はいつも四期のうつり變りと結ばれぬ。木の蔭によりて、日の今幾どきなるかを知り、花の咲き、實の結ぶによりて、春秋のさかぬを知り、收穫みいりのたびを指折數にて過ぎ行く年の數を知りぬ。

ヴィルジニーは日ふ、芭蕉の影の根方にさしたれば最早晝餐の刻なりと。また酸果の葉は凋み初めぬ、夜も近けりと。御身はいつ我等を訪はるゝやとある時隣人の尋ねしに、甘蔗の折にとベルジニー答へぬ。またある時はポールと己の歳を問はれて我か兄は泉のほとりの大きなココアの樹と同じ年生れ、妾はるこにある小とココアの樹と同じ年生れぬ、妾のこの世に出でし後、芒果の樹は十二度實り、橙の樹は二十四度花咲けりと。

サンピエル嘗てルッソーに對ひて、卿の作中にある某人物は卿自らを顯はさんと企むにあらずやと尋ねしに、ルッソー答へて、否とよ、其人物は在る所の我を描かんとせしにあらず、あたまほじと思ふ我を寫せしなりと言ひたりとか。『ポール、エ、ヴィルジニー』に現はれたる老翁は、正にサンピエルの『あたまほじと思ふ我』なり。社會を捨て、社會に捨てられて、南洋の一孤島に孤獨の生活を送りし件の老翁



は、歐洲の文明を罵り、人心の墮落を慨いて、所謂『失望の中に哲學を求めし』人なり。我は消極的の樂をうく。破船より救はれて、岩の上に投げられたる人の如く、我は自らの孤獨の地位より、外の世界に吹すさぶ嵐を推し量れり。遠き嵐の音を聞くにつけ、我が平和の愈よ深きを覺ゆ』と言へるは、正しくサン、ピエルが當年の境遇にあらずや。

奈翁は『ポール、エ、ヴヰルジニー』の愛讀者なり。渠はサン、ピエルを見るたびに、ベルナルダン君よ、いつ御身は他の『ポール、エ、ヴヰルジニー』と『印度の墓屋』とを思ふるゝやと尋ねしとか。

『印度の墓屋』はまた渠の天才を窺ふに足るべき作物。おかしからずや我等はその中の一佳句『不幸はラホルの焰の邦の極端にあるベニベルの黒き山に似たり。その山に攀づる間、爾の眼前には唯焼石の横はるのみ。されど爾もしそが頂上に達せば、爾の頭上に天を仰ぎ、爾の脚下にカヘミヤの王國を踏まへたるを感せん』とあるを瞑想して、不幸なる天才の一生の寔にこの句に似通ひたるを發見せん。『ポール、エ、ヴヰルジニー』はベニベル山の頂なり。

最後に我はラマルチンが傑作『グラジエラ』の中にて、この書を評せし一句を藉りて筆を擱くべし。

*That manual of ingenuous love; a book that reminds one of  
a page in the worlds infancy, torn from the history of the  
human heart, preserved in all its purity, and wet with tears  
contagious for all eyes of sixteen years.*

會話

“Neither the yunzfian nor the Finsterahorn  
has yet been trodden by the foot of man”

アルプスの嶠頂………截然たる懸崖の連嶂………千山萬峯の  
眞たゞ中。

峯をこえて澄み渡りたる薄緑りの雲静寂に懸れり。嚴しくも痛ま  
じき洞陰、皎々なる密雪、その雪の表に聳ねて澁面作れる山々、氷  
堅く鎖し、風厲しく掃ひたり。

二大塊、地平線上の兩巨人。乙女嶽と、ユングフアウ 驚フインスターアルホルン 峯と。乙女嶽は其  
隣人に尋ねぬ。『あたりの有様を物語りたまはずや。御身は善能見ゆ  
る筈なり、下界は今何事の起りて候にや』

幾千年は過ぎ去れり、一分時なり。  
鷺峯は答ふべく鳴り出でぬ。『濃き雲地上を蓋ひたり………待て  
暫し』

また幾千年は過ぎ去れり、一分時なり。  
『よし、今や奈何』乙女嶽問ひぬ。

『今こそ見ゆれ、下界はいづこも同じことなり。青き水あり、黒き  
森あり、灰色の石の堆く積まれたるあり、そが間際には例の小虫ご  
も躁ぎ廻れり、汝は知るか、嘗て我等を汚し得ざりしかの二足の生

物を』『人間よな』

『さなり、人間なり』

幾千年は過ぎ去れり、一分時なり。

『かの小虫どもは稀れになりたるやうなり』かく鷲峯は轟き出でぬ。下界は今よく見らる、河は縮み、森は薄らげり』

亦幾千年は過ぎ去れり、一分時なり。

『今君には何をか見玉ふや』乙女嶽問ひぬ。

『我等に近きあたりは聖於成せし如し。されど遠き谷間には猶班點ありて、物の動くが見ゆ』

『今や奈何』一分時ある他の幾千年の後、乙女嶽また問ふなりき。

『萬事宜矣、何所も今は朗らなり、汝が眺むる限りの隈々たゞ白砂

なり。……世界は我らが雪、雪と氷のみ、物みな霜と結び果てぬ、よやかな寂滅』

『まこと宜矣』と乙女嶽も曰ひぬ『されど老漢、我等も早や思ふ存分空話しぬ。いざ寝まらさずや』

『げにげに其時なり』

立宏大なる山々は眠に就きぬ。澄み渡りたる碧の空は永世の沈黙郷をこえて眠れり。

招魂賦

百四

七月十四日……今日はなき兒の魂迎へんとて、獨り淋しく門に立つなり。十里稻の花、風吹き、風吹きて、萩や脆き、露や摧けし。蒼然たるこの夕まぐれ、迎へ燈籠の穗影微かに瞬く。

あはれわが兒。

汝が逝きてよりまだ幾日もあらぬに、夙や于蘭盆の近けば、またもかの羸弱き足に十萬億土は急ぎ來べきか。途の疲勞のまだ癒えずやあるらん。袖に旅路の露の干しもあぬぬ間を、またも三途の河の

船に揺らるるかや。あな、いとしくはあれど、悲しくはあれど、父戀しと思はぬ、母戀しと思はぬ、たゞ歸り來よ、夙く歸り來よ。賽の河原に石積む暇もあらば、歸り來て看よ、この世の軒端に汝を待つ父もあるを。

汝が生れしは彌生某の日、雨上り空まだ霽れぬ、しめやかなる夜半なりき。曉近く雲足ひそかに破れて、大空には薄き光の星一つ流れぬ。地に聲あり、微かにして悲し、温かにして淋し、汝が生れしなり。星消えて跡なく、汝か命は五十餘日。微々たる運星散て千萬里、哀々たる幼魂逝いて萬億土。その星消えずこの胸に、その魂残りこの心に。星は希望を、汝は涙を。涙の泉に希望の星映りて、當世に哀樂の姿を宿すか。

百五

汝が逝きしは五月某の日。空は怒る、風、地は亂る、雨。この雨の夜風の夜、いとしき者を旅立せて、行衛も別かぬ闇地の空、野末に迷ふ姿も見えて、父は泣きしぞ。運命の星の跡追ふて、いづこに消ゆる汝が魂ぞも。そぼ濡れて雨は凌ぐに宿ありや、飢え疲れて風は避くるに隈ありや。悲しき旅姿、行ずり惱む小巡禮のそれか。いかにかゝる夜を孤り旅立ちて、父母の涙流し盡せしと汝は知らじな。

若かりき父も、母も。友の手前、世の手前、若くして子を持つ身を耻しと思ひぬ。耻かしと思はれし汝に何の咎ぞ。生れ落ちて廣きこの世に、吁、依頼るべき父母は、罪深しや、汝を咀ひぬ。いかに小さき魂の騒ぎけんよ。また羽がひもきかぬ鷓鴣の、巢に白堪へて、たま〜驚き飛べば、嵐は激し、海原の最中に。後は親鳥の叫び、

それさへ浪に葬られて。……………いとしや吾が少女、汝が魂はいづ

この果てに父母怨みてか。

黎明、希望の空に明け行くや、蕭やかなる部屋のうち、微かに汝か産聲の聞えしとき、蒼ざめし母の顔に紅の潮したる、いかに。乳房に縋るその唇の薔薇色して可愛かりし、いかに。物に凝視めし其眼の温き光宿して、曙のごと聖かりし、いかに。初めて宮詣ですとて、花紅葉、よき衣着せたるいかに。好き子よと抱き占むる祖母を熟視めて、初笑洩したる、いかに。終焉の夜もいと静かに、安けき眠に入るがごと、往生の眼閉ぢたる、いかに。いかに、いかに、短かくりしは汝が生命、思出澤なるは、汝が生命。さば、松の樹蔭の奥津城ごころ、父は泣かん。花咲かばまた泣かん、月照らばまた泣

かん。秋は草萩亂れて、ほろ／＼露も散るか。

蕾は折れぬ、枝に絶り、幼な兒は逝きぬ、土に歸り。搖藍墓と變りて、手遊びの人形空しく残り、僅かに母胎を出で、倉卒また闇路に遁る。一たび開きし其眼に、日の光入る間もあらせず、扉は閉ぢぬ、常世の不思議。運命の神の奇しきあざなひ、罪知らぬ少女の聖きを見よか、詩人ならぬわれ、歌知らぬをいかにせばや。珊瑚の腕麗しきを見よ、か匠工にあらぬわれ、斧なきをいかにせばや。我に歌なし、涙あり。我に斧なし、惱あり。風歌ふ風歌ふ。墓田の松。雨穿つ雨穿つ、碑石の面。自然我が爲めにこの殘虐の藝術をなすか。萩の下露自から墓石を清め、しづれ波かげ、秋の虫々いと迫めて鳴く。わが眼は先づ濕ひわが心かくて折れぬ。怨むべき自然ならじ、

謝すべき神の愛なり。涙に濡し喜の、深き味知る我ならずや、神の我ならずや。

\*

あはれわが兒、さらば歸り來よ。秋風の軒端に父ぞ待つ。汝が母は汝れの逝きし日より重き病の枕に就きぬ。神の御心にて、汝をば身代りに立させ給ひしぞや。恨むなよ、一人の闇の心臆すとも。母の魂をば誘ふなよ、また行く途の淋しくとも。あはれわが兒。

な き 母

母なき子、ある夜の夢に、天つ故郷の母を訪ひて、其膝に眠りぬ。  
忽ちみる、劍珮さやかに鳴て、南方の紫禁より帝王の鶴駕、徐々  
として我方に進み來るを。既にして近づき跪いて曰く、甘い哉、君  
が母の情や、請ふらくは、一日我をして、君に代りて、君が母の子  
たらしめよ。萬乗の尊位、率土の玉寶舉げて君に捧げんと。我答て、  
曰く、至尊の帝王、また我を煩す勿れ。君が玉笏と、荆璧と希くは  
君が手に收め玉へ。我はわが母を撰ぶ、我はわが母を愛すと。

母なき子、またの夜の夢に天つ故郷の母を訪ひて、其膝に眠りぬ。  
忽ち見る。金闕の西廂、靜かに玉扇を開いて、我方に進むものあり。  
回顧すれば、天上の仙姫、羞を含んで側に立てるあり。僅かに  
玉唇を開いて曰く、妬殺す、君が母の情や。たゞ恨むらくは貌の艶  
ならざるを。謹んで、儂が雪膚花顔を捧げて、君が母に呈せんと。  
我答へて曰く、多謝す卿が情や、されど故郷の園の眺めと、慈母  
の面わと變らばいかに淋しからん。我が母の慈愛はポルドーの酒な  
り、ふるくして愈よ甘し。我は我母の醜きを愛すと。  
母なき子、次の夜もまた天つ故郷の母を訪ひて、其膝にねむりぬ。  
かすかに紫門を叩いて、慈悲の御聲に我名を呼び玉ふは、萬能の  
主にはねはさずや。この星の夜を露にそほぬれて、わざ／＼我を訪

ひ玉ふは、如何なる福音をか齎し給へる。夜は高し、天上の秋、立たせ給はゞ、萩の上風聖き御身にもいかに厳しからん。許し給へ、俟たせ奉つる我身の罪のいかに深きよ。されど大神、我は今いとほしき母の膝に短き夢をむさぼる身なり。我が母の熱き涙を頬にうけて、遠き少年の昔を懐ふ身なり。『愛は神よりも深し』と、古聖の言ひけん言葉の意味を酌み給はゞ、涙の谷の罪か子にせめてはこの我儘を免じ給へ。大神よ、今宵我戸は君の爲めに明けじ。かく曰ひつゝ、すすり泣けば、大神其意を諒して、ほろえみて去り玉へり。ア、萬能の主よ、御身の渾身はたゞこれ慈悲にてまじませり。

母なき子、その次の夜も夢に天つ故郷の母を訪ひて、其の膝に眠りぬ。

高歡の杯充ちくくして、ひたぶるに甘き夢に耽りつ。我は幼な兒、母の子守唄の寢耳に遠し。兎角して聖母きませり。我母に向ひて宣はく、卿がいとし子の情のいかなればかくはめでたき。請ふらくば、一日儂に彼を貸せよ。儂、卿に送るに、天上の星の最も麗はしきを以てせん。我母答へて曰く、許し給へ慈悲の聖母。儂が子は儂が唯一の星なり。この子あるにまた何の星ぞ、この子無うして、また何の星ぞ。此に於て聖母感泣し給ひて、聲朗かに讚美の聖歌を謠ひ出で給ひぬ。げにや聖母の渾身は、たゞそれ愛にてまじませり。我は我がなき母に謝す。卿の愛はわがゼルサレムなり。我は夢にこの聖京を巡つて、敬虔の思ひをわたり。大神の慈悲と、聖母の愛と、皆卿の賜物なり。われは我がなき母に謝す。



## 精舎論

百十四

(一)

本篇は無限を主人公とし、人間を複主人公とせる一個の戯曲なり。  
吾人は端なく、此問題に撞着して、之を細論するの已むを得ざるものあり。故奈何となれば、時の古今と、洋の東西を問はず、偶像教にもせよ、佛教にもせよ、波羅門教にもせよ、乃至基督教にもせよ、寺院精舎なるものは、實に人間が無限に向けたる鏡の一なればなり。

(二)

歴史の光に照すに、寺院精舎の隱遁生涯は譏彈を免れじ。  
一國に其數あまたなるや、寺院精舎は融通の瘤なり、障碍なり、勤勉の中心を要すべき所にある惰慢の源泉なり。寺院社界の一般社會に於けるは、猶藤葛の椶に於けるか如く、腫瘰の人體に於けるか如し。彼等の繁榮肥滿は、やがて其國の衰滅なり。寺院精舎か文明の曙に於て、精神的開發に務めて、人の獸性を消耗せむるに夥しき功果ありしは明白なる事實なれど、それと俱にまた國民の健全をも損ねたり。殊に其制度漸く弛みて、次第に混亂の域に向ひ、終に今日の如き躰たらくとなるや、清淨時代に仰慕すべき凡百の理由は變

百十五

じて非難の的となれり。

寺院精舎に遁隠すべき時代は夙く過ぎ去りぬ。近代文明の初期に於てこそ、其進歩に多少の補益もしたれ、最早そが繁盛の時期にあらず。寺院を教化の具として之をみる、十世紀には或は適せん、十五世紀にはいかゞあらん、況んや十九世紀をや。まことや寺院制度と名くる癌腫は、幾世紀間相並んで歐洲の光明たり、榮譽たりし、卓拔なる伊太利及西班牙の二國民を殘賊して、殆んど骨骸の有様となしぬ。幸なる哉一千七百八十九年の大膽なる治療法あり、二國與に漸く快癒に向はんとす。

精舎特に今世紀の初期、伊太利、奧太利、西班牙に見られし如き舊式の精舎は、中世の結成物中最も悽慘なるもの一なり。そこらに見らるゝ庵室は重なる危懼の交叉點なりしなり、所謂加特利教庵は暗き死の光に充ちぬ。

中にも西班牙の精舎こそ、とりわけおどろおどろしけれ。霧充てる穹窿のもと、蔭暗き圓頂額の懷、重々しきバベル流の祭壇カセド、巨刹ラルの如く、高く幽暗の中に頭を擡ぐなる。白色の十字架鐵鎖によりて所どころ凄冥の間に掛るあり。象牙製の聖像 赤裸々にして黒壇の枝に吊さるゝあり。げにこの像よ、血に塗れたる形相の恐ろしくも又嚴めしき哉。財骨荒々しく突き出で、膝蓋皮はなれ、創痕新にして鮮肉を示しぬ。頭上の冠冕は白銀なり、磔刑の釘は黄金なり、額上の血はルビーなり、臉際の涙はダイヤモンドなり。このルビーや、このダイヤモンドや、眞に濕ひしめるが如く凄しくも眺められぬ。

更にこの小暗き蔭に列びて、號哭する人々を見よ。黒がねの棘荒々しき苔の爲めに其腰を割かれ、小枝の莖に其胸を痛め、不斷の祈禱に其膝を傷く。是誰家の子が、問ふを要せず、彼等こそ自ら良婦と信ずる弱性、天使を學ぶ怪物の群なれ。是等可憐の婦女子何事をか思量せりや、あらず。さらば一定の意志を持てりや、否らず。さらば彼等は愛を知れりや、亦あらず。さらば彼等は生きつゝありや、亦復あらず。彼等の神経は骨となり、彼等の骨は石と化しぬ。彼等の被物は編まれたる夜なり。彼等の息は恐ろしき死の呼吸の如し。この幽淵のうち、影の如き一物ありて、彼等を惑はし、彼等を戦か<sup>をの</sup>しめぬ。これ實に西班牙古流の精舎の情態なり。この凄其なる信仰の洞を窩巢として、幾多の少女は住ひしなり。また慘ならずや。

## (三)

西班牙または西藏にみられし如き寺院制度は、文明に對する肺症なり。天折せしめでは已まじ。一言以て被へば、民衆殄滅の媒なり。精舎的監禁は、人を闇するに同じ。歐洲に於ては、これ一個の刑杖なりき。加之、時に人の良心を戕殘し、宗門命令の下に強逼を加へ、庵室に封建制度を探りて如上の殘忍を敢てしぬ。口嚙され、腦閉されて、かくも夥多<sup>あまた</sup>の頼みなき人智は、不斷誓願の囹圄のうちに監禁せられしか。女衣の升天祭、生きたる靈魂の葬儀。人試みに思ひみよ。自然退化に之等の個人苦痛を併せ加へて、君がかの人間の發明に係る二

殮衣なる、女人の上衣と面帕を見ん時能く戦慄せざるを得るやと。

然りと雖も、哲學にも管せず、進歩にも管せず、炳焉たる十九世紀の火焰のたゞ中、寺院的精神は固執せられ、同時に禁慾主義はこの文明世界を驚異せしむ。かくも老朽したる慣習の己れ長からんとあせり務むるは、例之は鬢髮に纏はる黴臭の拗執の如く、食はれん事を願へる腐魚の口實の如く、壯年の身に着かんとする兒衣の頑愚の如く、生者を抱かんとてどれる屍體の撫恤の如し。衣は叫んで曰く『無情ならずや汝弱小の時、我汝を護りしに、何すれそ今我を棄つるや』。魚は叫んで曰く『我は深き海より來れり』。臭は叫んで曰く『我も一度は薔薇の香なりき』。屍體は叫んで曰く『我は汝を愛す』。精舎は叫んで曰く『我汝を教化せり』。是等に對する唯一の答あり、過古に於てはと。

かくも死灰の如き事物を限りなく持續し、人間の政府を木乃伊にし、腐爛せる邪説を挽回し、再び神龜を鏤ばめ、再び精舎を塗り、再び聖書を崇め、再び左道を補理し、再び狂迷を繕ひ、既に摩耗せし拂子に新なる柄を加へ、寺院を復興せんと夢み、寄生虫の増加によりて救世の功を擧げんと信じ、現在に過古を偷挿する如きは何たる怪事ぞや。然れども、如是所説に對して辨護の勞を取る者あり。これ等の説客よしや他の事柄に關しては同じく好箇の思索家たりとも、唯々單純なる處辨を有するのみ。彼等は過古に被らしむるに、謂ふ所の『聖權』、祖先の敬仰、時代づきの威儀、聖傳説、乃至正統論なる掩蓋を以てす。猶叫んで曰、『良民それ是を採れ』と。此の如き論理は古代に狎熟し、當時の卜者は之を慣用せり。黒色の曠に白墨を

摩塗し、さて叫ぶらく『彼女白し』と。

吾人は隨所に敬仰の念を拂はんとす。されはそが既に死灰なるとを認諾する以上、過古をも亦愛惜す。然とも若し過古にして猶生ありと頑守せば、吾人は之を譏彈し、之を殄滅するに努めざるへからず。

謬信と云ひ、執迷と云ひ、偽善と云ひ、僻邪と云ひ、是等の幻影は縦令幻影たりとも、人生に執着す。其影の如き物の中には、齒あり、爪あり、我等は是と互に肉薄して、相挑み、相闘はざるべからず。而して休戦なし。洵に影にしあれば、其頸を扼して、大地に抛つことは不可得なるべし。

基督曆十九世紀の午陽に當りて、佛蘭西精舎は縦令は日に面せる梟群なり。一千七百八十九年、一千八百三十年、乃至一千八百四十八

年の大都の眞正面に於て禁慾主義を公開せる精舎庵室は、これ一個の年代錯記なり。常時年代錯記を正して、之を抹殺せんと欲せば、唯々我等が主の暦年を綴れば可なり。然りと雖も、吾人の住する時代は決して常時にあらず。

よしさらば譏彈せんかな。

よし譏彈せん哉、されどまた辨別せん哉。眞理の特徴は埒外に逸せざるにあり。何ぞ誇張を要せんや。或物は打破すべし、或物は光明にすべし、また稽查すべし。偉大なる哉鄭重にして、且肅嚴なる研究の力や。去れば我等をして唯々光の滿すべきものなる火焰を荷はしむる勿れ。

茲に身を十九世紀に寘て、我等は歐洲にもせよ、亞細亞にもせよ、

はた猶太にもせよ、トルコにもせよ、寺院の間逸生涯に反対するものあり。『精舎』と云ふは『沼』と云ふに同じ。彼等の朽敗は明々なり、彼等の停滞は悲惨なり、彼等の醜醉は病毒を國民に傳染す。我等は幾多のファキル、ボンス、サントン、カロヤー、マラブー乃至タラポインが害虫の如く群棲せる邦國を想ふ毎に、未だ嘗て戰慄せずんばあらず。論じて茲に至て、猶一個の宗教問題の殘存するを見る。その問題たるや頗る神秘の相を持せり。請ふらくば、我等をしてしかと其面貌を窺はしめよ。

## (四)

人俱に來り俱に住む、何の權ぞ。協同の權によるなり。

人戸を閉す、何の權ぞ。萬人皆己の門戸の開閉しうる權によるなり。

人蟄居す、何の權ぞ。去來自在の權によるなり。

さば、籠り隠れて、彼等の爲す所奈何。

密々相語り、眼は地上を離れず、是勞せるなり。

世を忘れ、都を忘れ、娛樂を忘れ、身生を忘れ、虚榮を忘れ、利益を忘る。着る所は粗末なる羊毛にあらずんば、粗末なる麻布なり。誰一人産を私するものなく、こゝに入れば富める者も貧しきを致す。

されば此の窩窠に依帖の沙汰なく、人皆同様式の髪を被り、同じ衣を纏ひ、同じ黒麵包を食ひ、同じ藁に寝ね、同じ灰に死す。族稱す

ら皆消ゆせせて、唯々教名に答へ、一切肉體上の門閥を絶ちて、精神上の眷族を作り、全人類を一家族とみて、貧者を救ひ、疾む者をいたはり、唯だ僅かに伏従すべき者を定めて、皆な『兄弟』なる稱號を以て他を呼べり。

茲に汝は余を止めて言はん。『然れども是理想的精舎のことのみ』と。洵に然り、當にありうべき精舎にて足れり。余は實に其に就て語らんとするなり。

中世を外に眞き、亞細亞を外に眞き、渾ての歴史的政教的問題を脱して、茲に哲學的見解に照し、精舎を以て全く自然にして、自ら欲して進みし信徒のみを以て充足するものと假想する時、余は常に之に向て、眞面目なる對度をとり、また一點の敬意を拂はざるを得ず。精

舎の存する所、眞政治の當體あり。眞政治の當體ある所、必ず正義あり。精舎は實に『平等、友愛』の乗式なり。何を其自由の偉なる、何ぞ其相の赫々たる。自由は精舎を共和政體に移して應に満足すべし。更に一步を進めんか。

此等四壁の間に住する男女、同じ頭髮をまとひ、同じ活をなし、互に呼ふに兄弟姉妹を以てす。是大に可なり。さるからに彼等は他に爲すことありや。

然り。

請ひ問ふ其事奈何。

彼等は幽闇を眺め、膝まづき且合掌す。

これ抑も何の意ぞ。

(五)

彼等は祈禱す。

誰にか。

神に。

神に祈ると云ふ意義奈何。

我等の外部に無限あり。無限は固着なり、恒常なり、必然的に有體なり。故奈何となれば、既に無限なり、されば若し實質を闕かば、是は其意義に於て有限なるべければなり。而してまた必然的に有知なり、故奈何となれば、既に無限なり、されば若し知覺を闕かば、是は其意義に於て有限なるべければなり。生存の所思をのみ覺念しうる我等に、無限は本體の所思を賚む。尅實して言へば、無限は絶

對にして我等は双對なり。

我等の外部に無限あると同時に、我等の内部にも亦無限あり。是等の兩無限(畏るべき複數なる哉)は、互に相重疊して、第二無限は第一無限の下に横はり、そが鏡となり、反響となり、他の深淵と同心圓を作る一深淵たるものなり。この第二無限は亦有知にして、思索し、愛慕し、且意念す。既に兩無限にして有知なる限りは、各自一定の主張を持ち、下の無限にも「我」あり、上の無限にも「我」あらざるべからずして、下なる「我」をば靈と言ひ、上なる「我」をば神と言ふ。思索の道をたどりて、下なる無限を上なる無限に感觸せしむるを『祈』とは言ふなり。

人の心より一物たりとも取り去ることをなす勿れ。強制は悪しき



事なり。唯々改善し、變容するに止めよ。人心機能のあるものは深奥不可測の所に向へり。思索の如き、默想の如き、祈禱の如き是なり。深奥不可測の處とは、縦令は海の如きものなり。良心とは何ぞ、この不可測の海の羅針盤にはあらずや。思索や、默想や、祈禱や、皆この針の奇しくも大なる指さしにはあらずや。さればわれ人之を敬仰すべきは勿論のことなり。抑、如是靈性の赫々たる光輝の向ふ處はいづこぞ。影の中なり、即光の側なり。

共和政體の能く大なる所以は、人道の何物をも非認せず、攘斥せざるにあり。人の權に接して、尠くとも其と相隣りて靈の權存す。惑溺に克ち、無限を畏ると言ふは自然の則<sup>のり</sup>なり。徒に創造樹の下に屈服して、星光爛たるそが分枝の廣く大なるをのみ夢みる勿れ。

われ人に爲すべき義務あり。人心は開拓せざるべからず。奇蹟に逆て神秘は禦がざるべからず。不可測なるものを尊崇して、荒唐なるものを排せざるべからず。信仰を廓清して、教理の面より迷妄を刪去せざるべからず。神の園より害虫を驅除せざるべからず。

## (六)

今夫れ祈禮誓願の方法は、内、誠正なる限り、何れとして宜しからざるはなし。君が書を閉せよ。而して無限のうちにあれ。

世には無限を貶ぐる哲學あり。之と同じく病理學面より、種別する時、日輪を貶ぐる哲學あり。この哲學を盲目とは言ふなり。

世にはまた高名にして有力なる無神論者あり。是等の人も自己の

眞勢力に驅られて、いつかは、知らず識らず、眞理の側にめぐり戻され、事實上全く無神論者なりとは言ひ難し。彼等よし神を信せずとも、設し高才逸足の人たらば、必ず神を徴證せん。

更に驚くべきは、事實に冠らしむるに單なる言詞を以てして、よく心の満足を贏ちうるの極めて容易なることなり。霧に閉されたる北方の心理學派は『勢力』なる文字に換ふるに、『意志』なる文字を以てして、人心の理解力に一革命を遂げ得たりとさへ信せり。

『植物は生成す』と言はずして、『植物は意志す』と云ふに加ふるに、『宇宙は意志す』と言ふを以てせば、其義洵に富瞻なるべし。故奈何となれば、植物は意志す、故に『我』あり。宇宙は意志す、故に神ありとは、自然に涌躍すべき推斷なればなり。いかに況ん

や、此學派の貶げんとする宇宙意志は、この學派の主張せる植物理意よりも、首肯し易きものなるをや。

無限意志即神を貶ぐるは、唯た無限を貶ぐるに依てのみ能くする事をうべし。吾人は既に之を論じぬ。

無限否定は直に虚無説ニヒリズムなり。凡百の事物みな『心の幻影』となる。われ人虚無説と争ふことは不可得なるべし。故奈何となれば、正統虚無説學者は、對話者の存在を疑ひ、剩へ自己の存在すら定かならねばなり。然りと雖も、殊に知らんや、唯に一『心』字を冕するによりて、彼は自ら否定せし渾てを擧げて、彼我の別なく認諾せんと欲することを。總之るに、凡百の事物をして、一單音『否』なる推斷に歸依せしむる哲學には、思想の爲めに拓かれたる道途なし。

『否』に對すべき唯一の答は『然り』あるのみ。

虚無説に標的なし。何の處にか無あらんや。零はこの世に存在せず、凡百の物みな或る物なり、無は無のみ。

人はパンにより生息するよりも、推斷によりて生息するを多しとす。哲學は一個の力たるべし。人類の改善に於て、それが目的と成果とを發見すべきなり。ソクラテス、アダムに入りて、マルカス、オーレリアスを生ぜざるべからず。易言すれば、快樂の人より、智慧の人を出し、エデンを變じてリシュームとなさざるべからず。科學はよろしく其補藥たるべし。快樂と言ふか、それは拙き目的、憫むに堪えたる慾望のみ。快樂はもと畜生のことなり。靈の眞勝利は思想にあらざるべからず。されば、飢餓に換ふるに、思想を以てし、エリキ越栗幾

ツル失兒として神の觀念を鼓吹し、人の心に良心と科學とを親しましめ、此神秘なる双對によりて、高馬善焉の人を作るは正に眞哲學の領土たるべし。道德は滿開化の眞理なり。默思は實踐の始にして、絶對の眞理は之を躬行に現はさざるべからず。理想をして人心の空氣たり、飲食たらしめざるべからず。『人々取れ、これ我血なり我肉なり』と言ひうるものは唯々理想のみ。智慧は聖餐會にはあらずや。哲學をして好事者流が神秘を眺むる便宜の爲めに、それが上高く築かれたる單なる成樓たらしむべからず。

進歩は名なり、理想は模形なり。

何をか理想と言ふや、曰く神。

理想、絶對、完璧、無限、皆同字義のみ。

(七)

猶數言を費さんか。

我等は奸策詭計の充足せる寺院精舎を呵責し、現世に對して狼巖刻薄なる教法を侮慢すと雖も、而も隨所に思慮の人を敬せんと欲す。

我等は跪まづく人の前に頓首す。

信仰は必須なり、憐むべし、些の信心なきの徒輩。

黙想に耽る人を逸惰なりとはなすなかれ。こゝに可見の労働あり、かゝるに不可見の労働あり。

黙想は労働なり、思索は事業なり。

拱手能く務め、瞑目能く成し、仰天の凝視能く勞作す。

テール跪座すること四年、彼は哲學を創めぬ。

誰か修道士を以て遊手の人となすや、誰か隱者を以て素餐の徒輩となすや。

幽暗に就て思料を凝すは肅嚴の事項なり。

上來說叙せる所と些の矛盾なく、我等は信ずる事をうべし。墳墓に對する綿々不斷の掛念は、生者の固性なりと。此點に關しては僧侶も哲學者も一致せり。「我等は死せざるべからず」とはラ、トラツプの僧がホレースに答ふる所なり。

自己の生涯に雜ゆるに、墳墓の影を以てするは賢才の則にして、また隱者の則なり。この關係より、哲人も隱者も共通中心の側に赴

く。性急にして思慮を缺ける儕輩は、曰く、神秘に隣して踞坐せる此等の像は何をかなすや、彼等の目的奈何、彼等の功果奈何と。アラス！、廣汎なる萬物のいかに我等と相渉るやを知らずと雖も、我等を俟つ幽闇の現前にて、余は次の如く答ふるを難んせず。『恐らくこの世に、より崇高の事業なく、より要用の労働なし』と。祈禱者は不祈禱者に向て常に必須なり。

われ惟ふに、この全問題は祈禱に雜へたる思想の多寡に歸すべし。祈禱せるライブニツツは偉大なり、崇拜せるボルテアは秀麗なり。

寺院精舎は一個の棄權なり。設へ其方向に於て誤る所ありとも、献身は依然として献身なり。招かざる誤差を義務とし信ずる中には、一種の偉大なるものありて存す。

理想上より考察を下し、之を以てあらゆる方面に照して至公十全なるものとなす時、精舎特に尼寺は——故奈何となれば、現代の社會制度の下に、最も勞苦を負ふものは婦女子あり。而して庵室てふ追放地には、一個の保護備はればなり——疑もなく威嚴をもてり。庵室生活は例之高山の巔の如きか。俯瞰すれば、一方には現世の深淵あり、他方には未來世の深淵あり。精舎なるものは二世界を分つ、狹隘にして霧濃き界線なり。そこには微かなる生命の光、定かならぬ死の光と相雜りて、墳墓の殘照をなせり。

縱令彼等と所信を異にすとも、等しく信仰の杖にすがりて、生息する我等は戰慄し乍ら自恃深く、大神秘の四壁中に住するを敢てし

て、閉されたる世界と未開の天との間に期待する所あり、未だ昇らざる日陽の方に向ひて、唯そが在所を假想するを唯一の幸福とし、熱望を不可測の深淵に向け、不動の幽闇に眸をこらせる、是等の慊遜にして且偉大なる靈魂を眺むる毎に、未だ嘗て敬虔の畏と、羨み満てる憐憫とに動されずと云ふことなし。

## 茶の花

紅梅の艶なるはなけれど、秋雨のなかに淡く寂かに茶の花咲けり。  
 秋風と知るよしはなかりしが、朝寒を唧つまでもなかりしに、この夏我が庭に生ひて、我が庭に鳴き暮せし蟬の、昨日二羽、今朝三羽と、うすき羽破れて、飛石の冷たきが上に落ちたるみて、秋來ぬとをぞくも知りし。

縁日にて求めたる二鉢の朝顔、その色一つは白く、一つは紫なるが、紫は早く枯れて秋も知らず。白きが勢強く花瓣の大いなるをほ

こりに、幾朝々か咲きたりけん。そのまゝ忘れぬるを、嘗ての夕べ  
 黄昏の光にふと眼にとむれば、根あらはに、葉黄ばみて、鉢諸共に  
 倒れたる痛まし。秋も深しと願れば、隣りやの草萩、これも脆きも  
 のゝ敷には洩れざりし。

かくて。秋閑けぬ。しめぐと秋雨のなかに、淡く寂かに茶の花  
 咲けり。

許六が『百花譜』にも忘れぬるものから、我はなが姿のいと追  
 めてしとやかに、偏に淋しきを愛して已まず。

夕々毎に書齋の小窓開かる、やがて眼に入るものは先づなが姿な  
 り。いとさきものよ、ちさき花よ、淡白き星よ、……とは思へど  
 も、また流石に物足らはぬ心の、遠き奥より紅梅の艶なるに憧がる

る焔の血ありて、燃上りつ。悪むとにはあらねど満たず、恨むと  
 にはあらねど、恥ぢたる心地す。

噫、我は青春の身ぞ。

つくぐとなが姿を想ふに、形ばかりなる草庵の、扉は堅く閉ぢ  
 て、経讀む尼が、香たく小庭にこそふさはしけれ。隠士が茶室に風  
 情わたらんには、いかばかりか幸深からまし。許せ、我は青春の身ぞ。

想ふ青春幾何ときぞ。水は流れて花錦織るや東の間、花は散りて  
 水鏡うつすに閑もなかるべし。杯は溢るゝに宜しく、花は手折るに  
 罪あらめや。若人よ、御身の手にする杯の底ひたりとて、そは御身  
 の驕となるべきや。一度は紅梅の枝ぶり知らで、緑の髪早く老ひな  
 ば、いかにか御身の春の空しからまし。

いとしくも秋に咲きたる白き花よ。許せ我は青春の身ぞ。春なら  
 で、紅梅ならで、我がこの心を温めんや、我がこの胸を染めうべき  
 や。なが姿の静かなるに負くべきやうはなけれど、請ひ問ふらくば、  
 しばらく我をして、秋あり、なれあることを忘れて、杯の溢るゝを  
 楽しみ、紅梅の艶なるを偲ばしめよ。

吁、さりながらちさき花よ。なれ散りて冬も來ば、いかにかこの  
 庭の淋しくて、わが春のいよよ遠からまし。

## 田 舎

七月晦日<sup>みそか</sup>、我等が故國、露西亞の周邊一千里に亘りて。一帶の紺碧、  
 全き空際に漲りつ。白雲一片悠々としてそが上に懸り、半ば漂ひ、  
 半ば消え行く。簡雅、温暖………大氣は新しき乳の如し。

雲雀は聲震はして囀り、野鳩は鳩々と鳴き、燕は音なくして箭の如  
 く馳せ交ひ、馬は嘶きて草を噛み、犬は穩やかに尾を掉りて吠わす。  
 烟、牧草の香ぞする。松脂、獸皮などの香ひも、僅かに雜れり。  
 苧は今花の盛りにして、そが重々しく心地よき香を散じたり。



深くして傾きたる谿谷あり、周圍をかこめる柳の並木は大いなる頭を天に、裂けたる幹を地にして樹てり。谿谷を貫きて一條の小川が流れける。いと清く澄みたれば、底の小石もすきて見ぬ。遠きかなたには、天と地との境のあたり、碧なせる大河の縞をも認めつべし。

谿谷に沿ふて、其一側には清楚なる穀物小屋と、堅く鎖されたる小倉あり。他の一側には松もて造れる板葺の小家五つ六つ立てり。それもこれも家根の上には鳩の巢の高き杆樹ち、門の口には鐵もて造れる短鬘の馬を飾れり。瑕ある硝子の窓板はありとある虹の色に輝き、戸には皆花瓶を描きつ。榻ありて正しく小奇麗に並べられたるが、戸毎の前に立てり。低き丘の上には猫達集ひて、すき透るやうなる小耳を軽く立て、曬曝す。高く築れたる臺石の側には外室

の冷かなる暗みあり。

馬の腹掛引き延べて我はその谿谷の眞端に横はりぬ。あたりは凡て新に刈られたる牧草もて堆くつまれつ、押しつくるやうなる香ぞする。かしこげなる主は藁屋の前にそを擴げつ、照り付くる日の光に僅かは干さんとなり。かくてぞ穀物小屋には取り入れらる。そが上に寝まらばいといたく甘き眠は得らるべう。

縮れ毛の小供の頭は積まれたる牧草の間に隠見し、鶏冠かざせる鶏は牧草の中に蠅、小さき虫など窺ひ、唇のあたり白毛ある小犬は纏れたる草花の間に轉げたり。

亞麻の如き頭せる若者達、清き汗衿を着て、帯低くしめ、重々しき長靴穿ちたるが、鎧はざる荷車の上に倚りて白き齒露はしつゝ、

かたみに戯言ざれごとの鋭き齋發を交はずなりき。

丸顔の少女は窓の外に顔さし延べて、若者達の戯言いふを聞きては笑ひ、牧草の上の小供どもが悪戯わるあそびするを見ては笑ひぬ。

他の少女、強き腕かひなもて大いなる吊桶つるべを汲めり………吊桶は震ひつ、動りつ、長く耀く滴しじくをこぼすなりき。

我が前には新しき下着きて、新しき靴はきたる媪立てり。太く空虚うつろなる南京珠は三列をなして、黒く瘡たる媪の頸に掛れり。黄に赤の斑點ある被物かづぎはそが半白なる頭を包み、低く垂れて淀める媪の瞳に及べり。

さるからに、そが老いたる眼の中には、ようこそと人を迎ふるやうなる笑みをたぐえぬ。笑みは皺枯れたる満面に漲りつ。われ疑はじ、媪は七十路の坂をも踰えたりしを、………而も猶見る者をして若かりし日の麗しさを忍ばしめんとす。

媪は日に焼けたる指を震はしつゝ、右手には冷こき乳の皿を握れり未だ穴藏より出したての乳酪添えてあり、皿のまはりの滴しじくは眞珠の糸にも似たりや。左手の掌には温きパンの大片戴せて、我が爲にも来て呉れたる也。言ふにも似つ「食ひ給へ旅人、ようは來賜ひし。」雄鷄をとりのは急に音に出でつ、けたましく羽ばたきぬ。鎖されたる獣小屋の犢のもうとばかり靜かに低く應ずるなりき。

「ア、いかによき麥なるよ」と我が馭者のつぶやくを聞きつ………げに曠濶なる露西亞の田舎の満足よ、寧靜よ、豊饒よ、げに深き平和とよき暮しよ！。

我は重ねて思ふなりき。我等都びとがあせり求むなる、コンスタ  
ンチノーポリに立つ、サン、ソヒアの圓頂額の十字架や、その他あ  
らゆる事物や、そも此處には何の用かあらんと。

## 野 蜜

### 閭村の生活

壁一重距てても、朝に夕に、面合せ乍ら、物言はず、親みの心なきが  
都住ひのならひならずや。閭村の生活は之と異り。山川の距ては、  
心のまがぎとならず、草莽の荒れたるも、情愛の柵をなさず。畑の  
畔、小田の畦を通路として、人は互に相親しみ、夕げの烟は閑かに

空に交り、犬鷄遙かに相應じて、一村一家、天地小山川、人間自然の渾然として相融和せる趣、妙へにも亦深からずや。あはれ我は寒村寂里の夏の夕暮を愛して已まず。

### 愛神ウラニアン、

愛の神ビナスに二つの神坐あり。その一坐は、ウラナスの娘、母なくして生れたるウラニアン占め給ひ、他の一坐はジュピテルとダイオネの娘、パンヂアン占め給へり。愛神パンヂオンに侍べれる愛は、世に言ひ做せる普通一般の愛にして、心よりは肉欲に、情愛よりは容貌なりかたちに執着せる、鳥けだものと擇ぶなきものなり。然るに愛神

ウラニアンの統べ給へるそれは、またく異り。過古、現在、未來の三世に亘りて、いとも貴きもの、いともかしこきもの、聖く樂しきもの、聖くかなしきもの、クライストの教えしもの、プラトンのあこがれしもの、この世の凡て、宇宙の凡て、神なり、靈なり、生なり、死なり。最高善こゝにあり、最高美こゝにあり。ア、一切人生の寶珠は、集めてこの女神の温き御胸に藏み給へり。

女性の生命は愛なりと言へど、男性の生命も亦愛なり。憾むらくば、今の世には、兩性に通してウラニアンの神息に呼吸するまことにあざむかざる愛なきことを。

### 涙

涙ぞ静かなるが好けれ。敬仰厚き巡禮が聖都の境を巡るとき落魄の遊子か再び故郷の土に足踏入れし時、父母相思が別の闕をまたぐ時、不幸の嵐の過ぎ去りし後、死の枕に侍んべりし折、我等の涙は雨の如くには落ちぬものぞ。

花は深く咲きて、静に散り、涙は深く痛みて、静かに落つるこそ好けれ。

### 秋 郊 一 路

秋野に咲ける千草八千草、其一輪をとりてつくづくと看よ。茲に善あり、美あり、茲に悲あり、喜あり、茲に神あり、命運あり、かく思

ひつゝ、それを傍なる小川に投じみよ、その小川を時の流と觀せよ、我等はこれ散り浮く一輪の花、淵も瀬もある世ならずや。遠ざかり行く花の行衛、さては流の末のいかならん。……空の白雲いつこに急く、萩の上風いつこに消ゆる。ア、秋郊一路の教訓、また豊ならずや。

### 坐 右 銘

爾もし常に愛する時と同じ心地にてあらば、爾は天の歡をうくるをうべし。

爾もし常に死に對する時と同じ心地にてあらば、爾は天の悲を味ふをうべし。

爾もし常に星を眺むる時と同じ心地にてあらば、爾は宇宙の美を盡すをうべし。

かくて毎夕光瀾に洗心して當に問ふべし、今日我はいかなる無窮の事をなしたるか。

## 萬人の母

我等は萬人に共通なる一人の慈母を持てり、そは大地なり。我等現し世の測り知れざる命運の長き審問を終れる後は、皆此慈母の懷に抱かれて、靜かなる眠に入るものぞ。之を思へば、一石の碩々たるも、一草の梟々たるも、何とは知らず有難涙のこぼるゝ心地す。

タイモン、オプ、アゼンスは石を抱いて泣きぬ。想ふに其石温かなりけんか。

## 夢

夢ばかり奇しきものはなし。

幼き折睦しかりし友の、別れてよりいつか十とせ餘りもふれば、早や全く忘られて、如何など思ひ廻らすことなかりし者の、ふと一夜の夢に昔ながらの姿にて現はるゝことあり。晝街にて出て遇ひし人の、何處の誰なるやも知らず、たま／＼胸に刻まれてありしが、不圖その夜の夢に上ることあり。憎からず思ひしものゝ、さて何と

云ふこともなくて經ぎ來し人の、雨の夜の枕に現はれて、夢に泣か  
るゝことあり。依て想ふに、我や今宵誰か夢をか驚かさん。街にて道  
問はれし老翁が、藁屋の枕を月と與にや訪はん。故里の弟が罪なき  
夢の中に入りて、小學讀本中の人とやならん。あるはまた、些のゆ  
かりなき一佳人の夢に上りて、我よ今を泣きつゝあるか。奇しきは  
夢なる哉。そも夢中の因縁ばかり、神秘なるものはあらじかし。

### 兩天使

子供と鳥とは此世に於ける兩天使なり。

彼等は同じやうに朝風く起きて、喧しきまでに歌ひ躍れり。

等閑なる春の梢に來て、鳥は啄み得たるあらゆるものもて、己か  
巢を造れば、南椽の日和には少女子集ひて、白き赤き小切れのあり  
たけ持出てゝ、人形の御作りに餘念なし。

ある時我は焼野をさすらひて、半ば残りしいばらの中に、名は知ら  
ず小さき親鳥の、其鷓なまがらとともに焼け死たるあはれの殘骸を見たり。  
嘗て物の本を讀し中に、次のやうなる物語あり。霜のいたく降り  
て、寒さの烈しかりし夜、火に焼かれて死したる幼兒ありし。傳ふ  
る所によれば、彼は其人形を暖めつゝありしなりと言ふ。

### 冬の夜

さる片田舎の町はづれに、賊魁某なる者住めり。夫妻協同にて、悪しきことのみたくらみて、其日を送れり。一日捕吏物色して、悪漢夫妻を羅織して去ることあり。其二人の小供は後ろの小山に遊び居て、何事をも知らざりしが、やがて夕暮歸り來て、父母の家に入らんとするに、戸は閉されて、家のうち空ろなり。向ひの靴屋彼等と呼ばて、其母が殘せし紙片かみきれを渡しぬ。紙片には「某町某」と宛名あり。蓋し幼き小供を氣づかひし母の、慌たゞしきまを書き殘せしなり。店の主、彼等に語りけるは、御身等は最早こゝに住むこと協はじ。行けかしこに、こゝよりは程近し。初の町を左に折れて、人に遇はゞこの紙片を見せて道を問へ。

小供等はいで立ちぬ。兄は弟の手を引きつ、片手には案内の紙片を握れり。いと寒き日なりければ、こごえたる手は僅かに紙にふれて、寛く握りしのみ。とある町角を曲るとするに、迅風一陣さと落ちてきて、彼か手中の物を奪ひて去りぬ。夜色漸く重く、雪さへ降り出でければ、小供は遂にそを搜する術なかりき。

かくして幼き二人は運命の導くまゝに、世の街をさ迷ひ初めぬ。

## 涙の響

年は三十路みそぢの坂を越へて、悲酸なる境にありし寡婦の、嘗て語りて曰ふ。更たけ、人靜かなる夜を、一人つくぐと過ぎ來し方の罪咎など思ひめぐらすうち、ふと我頬を傳はりて落ちし一滴の涙の、



折から萬籟絶へたるなかに、地獄の底よりや傳はりけん、遠鐘の響にまごふまで、かすかに枕上の音に出でたる、その時ばかり悲しくもまた心行くことはなしと。

ア、涙の響！古人も未だ嘗て説かざりし。閱歴は獨創の天才なる哉。

涙

餘算山の端にかふる月も露のうちに沈み、希望の光に生るゝ日も露のなかにめざむ。生死何れか涙ならざりける。宜べナザレの里の『涙の子』は『涙の谷』の道を説ひて、慈悲の寶の貴きを教へぬ。さりや、古人の言葉。

He who does not weep does not see.

文人の眼

## 女人創造

かしこき婆羅門の學者が、あらゆる冷笑と諷刺の力もて、女人を次位に下し抑へんと務めしに比すれば、近代の我等はなかくかくまでに悪性ならじ。

今日女人は世の事がらにたずさはりて、相應ふせはしからず高き位置を占めにければ、やがてまた冷笑の的とならんとす。まことや、女人は、嘿して語らず、わめき論らはぬ造化に對して、ありとある智慧

の及物をむけてけり。

そのかみ印度びとは、女人に係る特種の存念をもち、また之を口にしてつゆ憚る所なかりき。その中にはまたくふさはしき節ありて、空想の翼を張るに及ばず、我等をしてげにもと點頭うなづかしむ。『月の指』と題したるサンスクリット物語は次の如く女人創造の事を語れり。

造物者ツァシュトリは今將に女人を造らんとする折に望みて、渠ははや男子の創作に多くの品だねを使ひ盡して、些しの固形體をも餘さざるとに心付けり。せんすべなくて、とこう打案じたる末、漸く次のようなる仕事にかかりぬ。

月のまるみ、虫のゆがみ、卷鬢かみじりのからみ、草葉のそよぎ、蘆のしなひ、花のほくえみ、木の葉の輕み、象の鼻の尖り、小鹿のまなざ

し、蜂の群のさそやぎ、日の光の樂み、雲の愁しみ、野兔のはにかみ、孔雀の心驕り、鸚鵡の胸毛の柔み、寶石の堅み、蜜の甘み、虎の殘忍、風の變心、焰の温かみ、石の冷み、懸巢鳥かしざりの饒舌おしやべり、鳩の鳴き聲、鶴の偽善、コキラの操、これ等の物を集めて渠は女人を造り、之を男に與へぬ。

さる程に一週過ぎて、男渠に來りて曰ふ。主よ、御身が與へ玉ひしこの生き物は、我が世をはかなましむ。渠女は不斷饒舌しやべりまはり、勝たに難きまでに戯弄ふざけ散らせり。我をば獨り殘すことなく、常々つき纏ひて、目を放なすひまさへなく、我が時の凡てを奪はでは已まじ。要なき事を言ひつものりて、怠けてのみ其日を送れり。とても雙棲の見込みなければ、今之を返しまつらんとて來ぬと。

茲に於て、ツァシュトリよじとうべなひて、渠女を取りもごしぬ。かくてまた一週を過しけるが、男渠に來りて申しぬ。

主よ、かの生き物を御身に返しまつりてより、我が世は頓に淋しくなりぬ。今こそ思ひ出でぬれ、かくくは舞ひつ、歌ひつ、渠女は我を慰めけるは。眼の隅に我をみやりて、我と遊び、我に縋りけるは。其聲のいかなれば、かく物の樂には似たりけん。其膚の見るになごかく美しく、觸るゝに柔かなりけん。請ふらくば、再び我にかの生き物を與へ玉へと。

茲に於てツァシュトリよじとうべなひて、渠女を返もどし與へぬ。さる程に僅か三日を過ぎて、男渠に來りて曰ふ。主よ、何故とも知る由なけれど、詮ずるに、渠女は我に樂みと言はんより、寧ろ煩

惱の種なり。ねぎまつるは再び渠女を納め玉へよ。

ツァシュトリ曰ひけるは、嘿せよ、去れ。我は以上かまはじ。爾の能ふまくにいかにも取り計ひね。男、されど、我渠女と與に住ふ能はざるをいかにせん。ツァシュトリ答へて、さらばとて爾はまた渠女無うして住ふ能はざるべしと曰ふ。かくて男に脊を向けて、渠の仕事を續けぬ。

いかにせまし、我渠女と與に住ふ能はず。さればとてまた渠女無うして住ふ能はざるを。かく男は獨語ひとりごとちぬ。

我はこの物語を友に示しぬ。その男も嘗ては世の常の失望にこりたる一人なり。渠苦々しき笑を洩して、印度の學者は女人創造に用ひしあらゆる元素を數ふるを忘れたり。渠は當にかんがらう更格盧の歩みと、駱

駝の脊と、鳩の額と、蜥蜴色せる髪に用ゆる藥品とを追加すべかりしなり。造化は確かに女人に佛蘭西流のかくごをうがたせ、渠女の口の充分に働さうる爲めに、其耳を思ふ存分後ちに附けぬ。而してまた、……嘿せよ、口善悪なき、老ひぼれの獨身者と、我は遮りつ。恐らく君はいづこにか、女人俱樂部にて長き月日を過ごせしなるべし。友は唯冷笑を洩したるのみ。さて曰ふ。ツァシュトリが女人に與へざりしものにして、我其與へられんことを懇望するものは翼なり。さらば渠女は、其質に適ひしあなたの國に飛び去るべく、女神的天性の媚に誘はるゝやうなりえんものを。

## 墓 場 感 懷

日曜の小春日和を八王子あたりに散策しての歸るさ、染井の墓地に小さき芝原を求め得て、疲れたる腰を下しつゝ、我は數時の瞑想を樂みたりき。墓地は聖き場所なり、凡ての罪の償はれたるところ、永久の靜安の宿るところ、あくせくたるこの世の小恩怨を忘れて、暫し靈の自由なる呼吸を樂むには、こよなくふさはしき場所なりと覺ゆ。我は瞑想祈禱の地として海と墓とを好む。波荒き大海の岸邊にこめたる祈禱の中には、偉大なる歡喜と偉大なる恐懼と交々雜れども、凡ての靜かなる墓のほとりにて、我が瞑想は常に隱やかに且つハンプルなるをうるぞうれしき。

『出死入生』と、素朴なる白木の十字架に書かれたる耶蘇教徒の墓に隣りて、城郭めいたる柵を四方にめぐらしたるさへあるに、前面には門牆堅く閉して、人の近よるを禁じたるいと嚴かなる墓あり。我はこの聖場にまで、かゝるプラウドを偷挿せんとする人の心の、いかに陋且慢なるかを惡まざるを得ざりき。

死して罪なく、賢愚平等なる聖場に何の門牆ぞや、極惡吳子胥ならざる者の、誰か死骨に鞭ちて其墓を汚さんとすべき。人はいかにずとも宥さざるを得ず、『大なる講和者』なる死の、我等の讐敵の上に投つるとき、我等の心に浮び來るは、其讐に報ゆるの期を失せし恨にあらずして、彼を宥すの餘りに晩かりしを怨むの恨なるべし。

されば我等は愛せざるべからず、愛せざる時は早晚及ぶべからざる悔恨の我等の上に投つると明なり。爾曹の敵をも愛せよと意味深き教訓を古聖は垂れ給へり。

常に墓に来て思ひ出すは、天才エミリー、ブロンテのとなり。彼女は其著書の終りに墓場の感懐を誌し、悪人暴君の墓にも、一樣に緑なる草の茂れるをみて、いぶかり疑ひぬ。

How any one could ever imagine unquiet slumbers for  
the sleepers in that quiet earth.

げに逝ける者をも宥し、残れる者をも和らぐる、平等慈愛なる死を、世の人のいかに冷にのみ見んとはすらん。

## 老 女

孤り瓢然として曠野を行く。

忽ち後へに當りて軽く忍びやかなる蹠音起りぬ……我が背後より歩み來れる者ありと覺ゆ。

願れば丈低く、腰曲りたる一人の媼ありて、全身を灰色の襪はらに包みたるが、顔のみさし覗くやうに現はしたり。黄ばめる面小皺寄り、齒落ちて鼻尖すもとし。

われ差し寄りけるに、……媼も止りぬ。

「汝は誰ぞ、何をか求むる、物乞か、施えんとにや」

答なし。さし覗きてつくづく窺ねば、兩眼半透明の膜に掩はれたり。日の眩きを避けんとて鳥の瞳に見るものゝやうなり。されど媼の膜は動かず……果せるかな、其の眼は盲ひたり。  
 「物欲しとにや、いかなれば我を追ふや」。再び問へども、依然として答なし。唯僅にわななくのみ。

我は踵を廻して道を急ぎぬ。

再び背後に當りて例の軽く、定まりて、忍びやかなる足音を聞く。

「またかの老耄めか、何すれぞしかく我に付き纏ふやらん」。かく訝りつゝも兎角してまた思ひ回しぬ。「定めし媼は道に迷ひしなり。盲なれば術もなし、我が足音をつけて里には出でんとなるべし。げ

に／＼さもあらん」。しかすがに言ひ知らず怪しき不安の念やうやう我を襲ひつゝ、思へらく、媼は我に従ふにあらずして、まことは我を導くなり。左に右に、そが思ふやう我を誘へば、我は覺らずして媼がなすが儘に従ひつゝあるにあらずや。

詮方なくて猶歩を進めぬ……されど見よ、我が行く道の正面に當りて黒く曠きものあり。……穴の類なり……『墓!』

忽焉として胸躍りぬ。『こゝなるか、媼の、我を導くは』。

勢込めて振向けば、再び面と媼に對ひぬ。……眼明きたり、殘忍にして邪心深き大いなる双眸もて我に見入りぬ。……正にこれ鷺鳥の瞳……われ儂みて覗くやうにして窺ひければ……  
 ……再び暗き膜、例の盲ひたる鈍き其相……

『噫、命運か、此の老媪は我が命運なり、人の遁るゝに由なき命運なり』

『人遁れんや、人進んや、何の狂痴ぞ……よし試むべきなり』  
かくて我は直に他の方面に道をとりぬ。

足を早めて行けど……例の軽き梵音はたぐと近く近く我背後にあり……また闇き穴。

三度道を更へて行く……ここにも例の梵音、人を嚇やかす闇き影。

狩り追はるゝ兎の如く、ひたすら迷ひて、いづこいかなる道をとるも……同じことなり。同じことなり。

『待て暫し』。我遂に思ひ直すことありき。よし一つ誑たよらかして呉れ

ん、こゝ動かであるべし。即時地上に腰を据わぬ。

二歩にして媪は我が背後に立てり、其聲聞かずとも、物のけはひに悟らずやは。

卒爾としてかの黑影遠く浮び出でつ、此方こなたを目掛けて匍ひ寄りたり。

已ぬる哉。顧みれば媪は眞つ向に我を凝視めつ。齒なき口元ゆがみて、苦笑を洩せり。

噫、人遁れんや。



## 信仰の廓清

世界文明史を私に書かせるなら、我は之を自然對人類の一大戰闘と見做して、二個の戰史に別て書く積りである。迷信に對する戰争、自然力に對する戰争、——言ひ易れば、自然の内的方面、及外的方面に對する戰争——この二大戰闘史を明かにするとが出来れば、世界文明發展の經路は略ぼ了解し得られやう。田を耕して秋の收穫<sup>みいり</sup>を收め、獸を射て皮を剥ぎ、船を浮べて波浪に勝ち、蒸氣力の働で車を運轉させると云ふのは自然力に對する戰闘で、之を教へるものは

應用科學、經濟學などである。第二迷信に對する戰闘は、人間の心的勞力の總てを包括して、宗教、詩歌、哲學乃至科學の一々が、皆其六韜三略を示すもので、靈の戰に關する虎の巻とも謂ひつべきものである。社會の進歩とは信仰の廓清を意味し、詩歌は感情慾念の淨化の爲めに、哲學科學は眞理の探討の爲めに、各々別他の方面から、人類の進歩を輔け、信仰の面から迷謬の分子を除くべく作られたものである。十九世紀は由々敷世紀である、哲學科學の勃隆につれて、久來の迷信を脱し、心靈の自由に憧がる聲は、大潮の寄するが如く、世界の四隅から起つた。その後半期よりかけて、今日まで社會の人心を支配しつつある靈力は、餘程奇妙なもので、アルフレッドミユッセーの言葉は能く之を現して居る。「神はおましぬ、然

れども最早おまさず』と曰ひ、『十九世紀の質實なる信仰は懷疑なり』と曰ひ、『噫基督よ、我は爾の聖なる言葉を信ぜず』と曰ふ。今日の人心は餘程複雑混沌の情態を呈してゐて、『我は泣きぬ、我は信じぬ』とあるやうな、單純清潔な古人の告白は、我等の望んで得べからざる所である。嗚呼基督よと偉大なる古聖人に隨喜して、我は爾の聖なる言葉を信ずの能はずと言ふ。——聖きかなこの人の教、神の啓示にあらずんばとまで賛嘆しながら、之を信ずるとの出來ないと云ふのが今日の質實なる懷疑の聲である。悲觀する者にはいかなる嘆聲をも發せしめよ。とまれ今日は實に由々敷世紀である。何れの時代も、新しき懷疑と新しき悲愁とを抱くと言ひけん。今日の新しき懷疑、新しき悲愁が、やがて生み出さるべきものは新しき信仰である。

現代の思想家メーテルリンクは叫んだ。『新しき靈の時代は近けり』と。新しき靈の時代とは、個々人が信仰の面より次第に迷謬の分子を刪り去て、廓清せられたる信仰、淨められたる懷疑悲愁を言ふではないか。懷疑は信仰の別名である。ヘーゲル辨證法の法式を籍りて曰はゞ、神に對する總念の進化である。一の撞着懷疑を解くことは、新しき撞着懷疑の紐を結ぶことになる。正題(信仰)と反題(懷疑)との總合は、所謂轉迷の境で、此境はまた新しき正題となりて、新しき反題を生む。恁様にして、再新再生、極りなき所に信仰の極意がある。かるか故に今日の懷疑は今日の信仰である。尠くとも今日の懷疑は、昨日の信仰よりより淨きもの、より進歩したものである。迷信の附き纏つた信仰より、迷信と戦ふ懷疑は一段神に近きも

のである。一の神に安心を以てゐる人よりもより偉大なる神に懷疑しつゝある者が、其信仰の程度に於て高き位置にあると云はねばならぬ。卑き神に信ずる勿れ、高き理想に憧憬せよ。これ我等が心靈の叫びである。『神我を殺すも、我は猶爾に信せん』と曰つたマホメットの立命の中には、總ての嵐ストームを含んでゐるではないか。大いなる自力的の立命は、最も極端なる懷疑の組成物である。爾の信仰の中に、希伯來希臘の舊き迷信と悲愁を混じてまでも満足せんとする爾の心靈は、既に業に墮落の第一步を踏んだもの、消極的罪惡の罟に墜ちたものである。我等の心靈の爲めに新しき衣を縫ふべく、我等は懷疑の勞働にいそしみて、真理のコインを贏ちうるやうに努むべきである。迷信と戦つて、信仰の廓清を期すべきである。

恁様に論じ來らば、或人は反問されるであらう。よしや迷信であらうが、誤謬であらうが、自分はかくかくの宗教觀または世界觀を持つてゐる。自分で恁様に信じて、之を守つて行くに一向差支はなからうと。勿論迷信と言ひ、誤謬と言ふとは尺度の定まつた問題でないから、爾の所信は謬である、かくかくであるべきだと明確に示摘しうべきものでないが、一個人に理性のある如く、一時代にもまた夫々の理性があつて、時代の理性の認承を許さない信仰を守つてゐる人は、其時代より迷信の徒と排斥せらるべきである。さらば時代の理性はいづこにあるか。時代の道德は多く其の下層に發見せらるゝものであ

るが、時代の理性は其の時代の上層即ち自覺を有する團集の間に發見せられ、この團集が共通に有する理性の承認せない分子を信仰の間に雜へてゐる者は、其時代より迷信の徒と見做れねばならぬ。卑近の例をとるならば、今日は最早王者の聖權、奴隸の天賦など云ふことを信じてゐる人は無からう。若是あらば、其人は迷妄の譏を免れない。是と同じやうに、通俗の意味に於ける靈魂の不滅はどうであらうか、天罰（審判の外界にありとするもの）と云ふとはどうであらうか。無論是等の事がらには科學は甚だ乏しい光明を投げるのみであるが、現時代の純粹なる理性の聲は之を承認するであらうか。

個々人が正義道德の觀念及其行爲を支配する唯一の動機は、其人の懷いて居る世界觀または宗教觀である。而して世界觀または宗教觀なるものは、神秘不可思議界が人間の腦裡に投じた寫象に外ならぬ。人間の好奇心はこの不可思議界の寫象になるべく偉大なる、成るべく壯麗なる相を帶ばせやうとする幻想に驅られる。此に於てか渠等は神と謂ひ、靈の不滅と謂ひ、奇蹟と謂ふやうなる嚴かめしく、麗しがるべき事を臆るげに瞑想する。恁様な幻想は恐怖の一變體である、盲従の一畸形である。眞理の前に不轉退なる覺悟を以て、精進向上する勇氣ある人のとらない所である。

人の思想信念が感情に上つた時が其人に進化を來す時である。泡の如き幻想が、何で斷れず感情の刺激を促すことが出來やう。『吾は神を信ず』と云ふ事は其れ自身何の價值もないのである。其いかに信ずるか、其信念がいかに其人の感情行爲に響影するやが當の問題で

ある。神を疑ふ人の疑が其人の感情行爲により、聖き影響を及ぼすならば、りの人は信仰の程度に於て、神を信する者に優るとすべきであらう。絶大なる頭も心の醜さを隠すことの出来なかつたベーコンよりも、一片の淨き心から神を疑つたシェレーこそ、洵に神の御心に協つた者であつたらう。神の御名によりて善を強ひられるよりも、神を棄てて良心の聲を聴け。盤座して念佛稱名の痴態を學ばんよりは、市場に出で、慾心の刺激を試みよ。意氣地なき安命慾、一切他力的の無氣力、または偉大壯麗等の幻想の爲めに信念を繼がれてゐる人には、基督教の神も、希臘のアポロ神も何の相違があらう。且つや、幻想は個人及社會の進歩に尠からぬ妨害をなすものである。なぜ我等はその一時的の甘美に驅られて、それが害毒を醸すまで、幻

想または虚偽を留存する必要があるか。なぜ、我等はそれが害毒を醸せぬまでも我等の進化を阻害する幻想または虚偽を愛撫せねばならぬか。聖書に現はれた奇蹟の眞偽は別問題として、たゞ基督教の尊威を維持し、または其詩歌的趣味を悦ぶために、之が眞實を肯定しやうとするやうな幻想に驅られつゝある人は今日同宗の信者に比々として皆然りだ。是等の人は一の奇蹟を惜んで、宇宙皆是奇蹟なることを知らぬ檐板漢に過ぎない。

幻想虚偽——實に信仰に此上もない大敵である。我等は務めて其根を斷たうとするも、遺傳習慣の拗執に捕はれて、充分自由をうることは困難であるのに、何ぞ之を愛撫して居る暇があらう。我等の憂は思想信念の正鵠を得つゝあるや否やでなくて、幻想虚偽の影に迷

はされつゝあるや否やにある。

舊信仰既に廢れて、新信仰未だ興らずとは、現代に聞く嘆聲である。舊き泉は枯れて、清新の水未だ湧かずば、強て濁り朽ちたる舊水を湛へて置くよりも、其底を洗ひかわかして、新しき清水の出るを俟つに如かぬてはないか。自然の進歩よりして舊新仰の我等を見捨てるは、決して悲むべき現象でない。新信仰未だ起らずは、よろしく我等の心を空にして俟つべきである。空か、空か、この心決して空にあらず。嗚呼其底には未だ名なき、新しき生氣の漲りつゝあるのである。『新しき靈の時代は近けり』。

## 三

近代科學の進歩は神聖なる語の意味を縮めた。いや縮めたと言ふは宜しくない、狭く深くした。人間の運命なる語は、今日殆んど死の外に適用を見ない。雷霆も辰星も疾病もみな運命の埒外に出た。神の聖賦と信ぜられた王者の權、奴隸の從順も最早昔の夢となつた。今日の社會の不平等も全く人爲的のもので、決して運命即ち神の意でないことが分明て來た。死、それすらも、依然として神秘の被衣かっぎに蔽はれ乍ら、其手に持つ威喝の刃は漸く錆び初めた。奇蹟に對し、靈魂不滅に對する人の思想も重大の進化を閲みした。ア、然れども遺傳的迷信の囿圍を脱すべく、人は餘りに惰性の強き『フライ、ホイル』である。

私は茲に極端なる一例をとる。真理の弓を一方に曲げ過ぎる惧があらば、うれは他の一方に偏した歪を正して、物の正鵠を得んが爲めである。

God—この一語の中には總ての神聖、總ての威嚴を含んでゐると與に、また非常なる恐怖を豫想する。この一語を聞くときは盲信犠牲など云ふ聯想に打たれると、恰も忠孝の二字が幾多の悲劇を織りなしたと同じである。純白なる處女の良心は愚か、其身軀にさへ迫害を加へた歐洲中古の精舎の有様を諸君の心に浮べらるるならば、蓋思半に過るであらう。

人は謂ふ愛は神である、智慧は神である、また真理は神である。なぜ我等は愛を信じ、智慧を信じ、真理を信ずるに、是等のものに

神と云ふ別名を付けて信ぜなければならぬのであらう。愛を愛として、深く愛に信じたならば、我等は愛の精華を摘むとが出来やう。智慧を智慧として、深く智慧に依頼らば、我等はよく心靈の奥に樂み得やう。真理を真理として真理に住はば、我等はよく萬有の鍵を握り得やう。殊更に神の名を掲げてくる要はないのである。況して神なる文字には、歴史的慣習の久しきより、謬迷の意味が纏つてゐて、一度この言葉を口にする者は、知らず識らず其謬迷の渦中に巻きこまれるやうになる。強ひても神の名を凡ての物の冒頭に振りかざさうとする今日の宗教家よ。さらば御身等は、ヤコプベーマンが『愛は時に神よりも大なり』と喝破した故智に倣て、『愛は、智慧は、真理は、神よりも大なり』と叫ぶの勇猛心を起し得ないのであるか。

餘り私の論は進み過ぎた。

四

私は前の章で述べた。近世科學の進歩は神聖なる語の意味を縮めた、いや縮めたと言ふはよろしくない、狭く深くしたと。信仰の廓清とは不可思議界の領分を狭め、又は掠奪するの謂ではない。人智の發達につれて萬有の神秘は消滅せずして、唯其位置を易へ行く。正しき場所に神秘の住家を定めるとは、社會の進歩に尤も重要な事項であつて、信仰の廓清とは這の般の消息を指すのである。神秘の位地の二三の移動、弊害を醸す場所より害なき場所に、害なき場

所より、善をなし、幸福を導く場所に——この二三の移動は實に人類の全進歩に相當したものである。單に其名稱をとり易へるばかりでも、我等の進歩に多大なる利益がある。メーテルリンクは曰つた。その昔『諸神』(Gods)と呼ばれたものを、我等の世には『生命』(Life)と呼ぶと、生命なる言葉が諸神なる言葉と同じく不可解であるにしても、其名に惑はされ、或は其名を利用して詐偽をするとの出來なくなつただけ進歩である。近世の哲學者が昔の宗教家と同じく、神秘絶對の存在を認め乍ら、之に神なる名辭を附することを拒まうとするのも全く同じである。假にハルトマンの哲學を領承して神秘絶對なる存在を、理性と意志とを具存する彼が所謂『無意識』と名けんに、うは名辭の新なるだけ、迷信の伴はざるだけ、從來の名よりも



推擧すべきものであらう。嗚呼されど神秘は神秘なり。神及び超自然的な世界は、吾人の理性を超えて、之を拒むとも、之を確むるとも不可能の事である。大なるカントも哲學科學に界限を置いて、信仰の天地に手を觸るゝの無暴を敢てせざつた。

さらば、信仰の廓清とは何を意味するか。神秘の堺を明にし、誠の神秘を神秘とし、人心の謬迷から割り出されたる幻想的神秘を棄て、人工の神秘の剝がれると與に、大神秘の海の我等の眼前に開展せらるるを俟て、宇宙人生に於ける神秘の目的、神秘の起原、其辭、其動を體得して、不可測なるものを尊び崇め、荒唐なるものを排斥し、教理の面より迷妄を刪り去り、神の園より害虫を驅除するにある。

進んで問ふ信仰はいかにして廓清し得らるるか。自然科學の力によりて身軀の自由をうると與に、總ての學問詩歌を籍りて、思議し得べき世界を闡明し、神秘不可思議界の領土を確にするに外ならぬ。哲學を一個の力として、肉の人より智慧の人を出し、エデンを變じてリセウムとなし、人の心に良心と科學とを親しましめて、この雙對より、高焉善焉の人格を作り出すにあるのだ。

明治三十八年四月三十日印刷  
明治三十八年五月三日發行



不許  
複製

特約販賣店

著者

中澤重雄

發行者

東京市小石川區宮下町五番地  
小山內 薰

印刷者

東京市日本橋區兜町二番地  
天野勝彦

印刷所

東京市日本橋區兜町二番地  
東京印刷株式會社

發行所

東京市小石川區宮下町五番地  
七人發行所

東京市本郷區元富士町

盛春堂

巒華集奧附

定價參拾錢

定價廿五錢

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

大 賣 捌

東京  
東京  
東京  
堂

同  
上  
田  
屋

同  
東  
海  
堂

同  
勉  
強  
堂

京  
都  
便  
利  
堂

大  
阪  
盛  
文  
館

東京  
至  
誠  
堂

同  
中  
庸  
堂

同  
盛  
光  
堂

同  
栗  
原  
書  
店

同  
大  
黑  
屋

同  
岡  
島  
新  
聞  
店